りますか、此肉體の世に於てのみ理想を索むる文學者や美術家ほど憐れむべき者はありません、彼等はたゞに汚れたる社會の寫實家たるに過ぎません、彼等はたゞ盜賊を見て吠る犬の如き者でありまして、高きに昇て地の全景を寫し得る鷲の技倆を有た者ではありません、ラフハエルも、ハイドンも、ミルトンも、ヲルヅヲスも天に國籍を移さずしては彼等の大作を作り得ませんでした。

さうして家庭の大難題に就ては……如何にして家庭を潔めませうか、如何にして夫婦相敬し、親子兄弟僞らずして相愛し、吃く事なく、猜む事なく、勞働と節儉とを以て最大幸福と思ふやうになることが出來ませうか、一家の收入を增せばそれで幸福なるホームが出來やうと思ふは大間違であります、上流社會に仲間入して初めて家庭の新趣味を嘗ふことが出來やうと思ふのも大間違であります、去りとて東洋風の忠孝道德をいくら注ぎ込んだ所が心より滿足するの家庭は決して出來る者ではありません、家庭とは家內に設けられたる待合茶屋

ではありません、即ち他人の手を藉らずして、一家相集つて娛樂を盡すための所ではありません、家庭は心靈の交際所でありまして、既に此世以外に於て溢るゝ計りの安慰を持つ者が、此世に在るの間、其最も親しき者に此安慰と歡喜とを頒つための所であります、我等は家庭に在て妻に慰められ、子に事へられんとするのではありません、我等は既に大なる恩惠に與かつた者でありますから、我等より弱き我等の妻子に出來得る限りの保護と親切とを與へんとするのであります、此心があつて、家庭は義務の處ではなくして愛心の所となるのであります、社會の制裁を怕れて妾を蓄へないのではありません、神が我に委ね給ひし一人の婦女に向て離りなき誠實を表せんためにあだし女に眼を觸れないのであります、老後の準備をなさんがために兒女を敎育するのではありません、我に委ねられたる幼き者の心に天の神を顯はさんために彼等に道を傳ふるのであります、我等の家庭は天國の雛形であります、不完全ながらも此地に在て天

國に似たる場所を建てんとして我等が設けたる所であります、是れは家屋ではありません、亦庭園でもありません、是はホームでありまして心の富を頒つ處であります。

「凡そ其生命を助けんとする者は之を失ひ若し其生命を失はん者は之を存つべし」（路加傳十七章三十三節）、此世を救はんとするものは却て之を救ひ得ず、此世を棄る者が却て之を存つのであります、キリストと偕に十字架に釘けられ、此世の慾念全く絶え、我に父母なく、妻子なく、社會なく、國家なきに至て、私共は初めて眞正の孝子となり、眞正の愛國者となり、眞正の社會改良家となることが出來るのであります、斯くて國を救ひ、家を起し、社會を改良するものは決して世に稱へられる所の現世的基督教なるものではありません、そんな者は世に無い計りでなく、若し有りとするも、是れ決して世を益する者ではありません。

（明治三十五年七月）

失望と希望

私共に取りましては愛すべき名としては天上天下唯二つあるのみであります、其一つはイエスでありまして、其他の者は日本であります、是れを英語で白しますれば其第一は Jesus でありまして其第二は Japan であります、二つともJの字を以て始まつて居りますから私は之を稱して Two Js 即ち二つのジェーの字と申します、イエスキリストのためであります、日本國のためであります、私共は此二つの愛すべき名のために私共の生命を獻げやうと欲ふ者であります。

イエスは私共の未來の生命の在る所でありまして、日本國は私共の現在の生命の在る所であります、爾うして神を信ずる者に取ては未來も現在も同一であります故に私共に取てはイエスと日本國とは同一のものであります、即ち私

共の信仰は國のためでありまして、私共の愛國心はキリストのためであります、

私共はキリストを離れて眞心を以て國を愛することが出來ないやうに、亦國を離れて熱心にキリストを愛することは出來ません、私共が基督教を信じた第一の理由はそれが私共の愛する此日本國を救ふの唯一の能力であると信じたからであります、私共と日本國との關係は父子の關係、夫婦の關係、君臣の關係よりも更に數層倍深い、堅い、篤い關係でありますから、私共は私共の國を離れて獨り自から救はれんとて基督教を信じません、私共は若し詛はるゝならば私共の國と偕に詛はれんと欲する者であります、若し救はるゝならば私共の國と偕に救はれんと欲する者であります、私共は日本國と偕に私共の靈魂を救はれんためにキリストに往いたのであります、獨り救はれんとて彼を求めたのではありません。

事情斯くの如くでありますから日本國の運命は私共の最も心配する所のもので

あります、日本國は如何なりませうか、此愛する父祖の國は終に滅びませう乎、或は之に救濟の希望がありませう乎、若しありとすれば如何したらば救はれませう乎、此事は私共の腦裡を占領する最大問題であります、夜となく晝となく私共を驅り立て寸時も私共の心を離れない問題は實に此國家救濟問題であります、「ア、我が神よ、願くは此憐れなる我が國を救ひ給へ」とは英國の愛國者ハムプデンの臨終の時の祈禱でありました、「若し我が兄弟我が骨肉（彼の國人を指して云ふ）のためならんには或ひはキリストより絶れ沈淪に至るも亦我が願ひなり」とは使徒パウロの熱誠なる表白でありました（羅馬書九章三節）、若し我國にして救はれざらんには我が救濟何にかあらんであります、私は獨り天國へ往くことを望む者ではありません、私は私の生命よりも私が愛する此日本國の救はれんことを望む者であります、「ア、我が神よ願くは此憐れなる我が國を救ひ給へ」とはハムプデンのみならで何れの國人でも總てキリストを信ず

る者の絶叫の聲であります、基督信者には愛國心なしと曰ふ人がありますが、彼等は未だ父なる神を識らず、故に私共の心を識らない人達であります。

嗚呼日本國よ、若し我れ汝を忘れなば我が右の手にその巧を忘れしめよ、若し我れ汝を思ひ出でず、若し我れ日本國を我が總ての歡喜の極となさずば我が舌を腭に附着しめよ（詩篇第百三十七篇）。

愛國心は世の所謂る「愛國者」の專有物ではなくして私共キリストを信ずる者の專有物であります、世にキリスト信者の愛國心に優る潔い、熱い、高い、深い愛心はありません、コロムウエルが英國を愛せし愛國心、ガステバス・アドルフハスが瑞典國を愛せし愛國心、サボナローラが伊太利を愛せし愛國心、亦近時に至りてはクルーゲルやジューベルトなどが彼等のトランスヴァールを愛せし愛國心は實に彼等がキリストに在て懷きし愛國心でありまして、斯かる聖き深き愛心はキリストを信ずる者にあらざれば到底持つことの出來ないものであり

ます。

此我等の日本國は如何なりませうや乎、此切要なる問題に對して此國に於て發行される所の新聞紙の記事が與ふる所の答は唯一つであります、即ち滅亡であります、爲政家の墮落、教育家の墮落、僧侶神官牧師の墮落、詐欺、收賄、姦淫、竊盜、强盜、殺人、黴毒、離間、陷擠、裏切り、……是が我等が日々の新聞紙に依て讀み聞かせられる所の事柄でありまして、是等の事柄を除いて別に新聞と云ふ新聞はないやうに見えます、聖書に記されたる罪惡の目錄の中で今の日本人に依て犯されない罪は一つもないやうに見えます、苟合、汚穢、好色、偶像に事ふること、巫術、仇恨、妒忌、忿怒、分爭、結黨、異端、娼嫉、兇殺、醉酒、放蕩（加拉太書五章十九、二十節）、此中何れが今の日本人の中に缺けて居りますか、政治家は節操を賣ることを何んとも思はず、彼等は相互に汚穢を語て少しも恥と致しません、忠君愛國を敎ふる敎育家が收賄の嫌疑を以て續々と

獄舍に投ぜられます、數萬の民が饑餓に泣いて居りますれば、彼等を饑餓に迫らしめたる人は朝廷の恩惠を身に浴びて奢侈淫逸に日を送つて居ります、偶々正義公平を絶叫する者があると思へば、是れは不平の聲であつて義を愛するの聲ではありません、同胞は相互ひの惡事を聞くを以て何よりの樂みとして居ります、妒忌は父子の間にも、兄弟の間にも、師弟の間にも行はれ、今日の師弟は明日の讐敵となり、骨肉の兄弟さへ互に相困めることを以て正義國家のためであると思つて居ます、政府は其各部に於て腐敗を極め、內閣腐り、陸軍腐り、海軍腐り、內務腐り、外務腐り、文部までが腐敗の氣に襲はれて、今は小學敎師までが賄賂を取るのを以て當然の事であるやうに思ふに至りました、若し是れが亡國の徵でないならば何にが亡國の徵であります乎、若し罪惡のほか何の報する所のない國が千代に八千代に榮え行くものでありますならば、正義とは何んと價値のない者ではありません乎、若し暗黑の社會があるとすれば其れは

日本國今日の社會ではありません乎、不安心極まる社會、少しの信用をも置けない社會、儀式一片、全然虛僞の社會とは實に我國今日の社會ではありません乎、罪惡は日本のみに限らない、西洋各國にもあると言ひて自から慰めて居る人もありますが、然し罪惡にも度合ひがあります、日本今日の社會は善事の至て少ない、殆んど罪惡のみの社會であります、即ち惡人が橫行跋扈することの出來る社會であります、其貴族たる者が到る所に幾多の不潔を行ふことあるも誰も怪まない社會であります、其學者たる者が頓でもない不道理を唱へましても却て國民多數の賞讃を博する社會であります、即ち眞實とか無私とか云ふことは唯口に唱へられる計りでありまして、之れを眞面目に信ずる者の殆んど一人も無いと言ふても可い社會であります、希望とか歡喜とか稱すべきものは地を拂つて無く、唯有るものは失望と悲憤慷慨とのみであります、此君子國と稱へられし國の民にして、少しく世の中の經驗を有つた者で、悲慘の歷史か墮

落の經歷を有たない者とては殆んどありません、純正なる淑女はありません、純潔なる紳士はありません、日本人は皆な傷物であります、その花の如き顏の裏面には熱き涙の經驗を匿くして居ます、その柔和の如くに見ゆる態度の下には言ひ盡くされぬ程の仇恨の刄を藏して居ります、芙蓉の峯は何時も美しくありますが之を仰ぎ瞻る民の心は常暗の暗を以て包まれて居ります、其名こそ櫻花國でありますが其實は悲憤國であります、絕望國であります、人々憂愁と怨恨とを懷いてイヤ〳〵ながらに世渡りを爲して居る國であります。

今少しく日本國の今日の狀態を聖書の言に照らして見まするならば實に寒心すべきものが多くあります、「ア、罪を犯せる國民、不義を以て充されたる民、惡を行ふ者の裔、道を亂す種族……全腦は病み、全心は困憊る、足の跖より首の頂に至るまで健全なる所なく、唯創痍と打傷と腫物と而已、而して之を合はす者なく包む者なく、亦膏にて軟らぐる者なし」（以賽亞書一章四節、一六節）、「汝

等の長輩（政治家、敎育家の類を指して云ふ）は反きて盜人の伴侶となり、人各々賄賂を喜び、贓財を追ひ求む」（同廿三節）、是れは實に日本國今日の狀態有の儘を畫いたものではありません乎、亦預言者エレミヤは亡國の前徵として社會の狀態を述べて申しました、

彼等は皆な姦淫する者なり、彼等は此地に於て眞實のために强からず、惡より惡に進むなり、……汝等各自其隣人に心せよ、何れの兄弟をも信ずる勿れ、兄弟は皆な欺きをなし、隣人は皆な讒り廻ればなり、汝等は各自其隣人を欺き、かつ眞實を言はず、其舌に謊を語ることを敎へ惡を爲すに勞る、汝等の住居は詭譎の中にあり、

何んと活畫的の記事ではありません乎、火を見ては火事と思へ、人を見ては泥棒と思へと唱ふる我國今日の社會の全寫しではありません乎。

若し又貴族と富豪との奢侈と無情とに就ては預言者亞麽士の言は非常に適切で

あります、

汝等は災禍の日をもて尚ほ遠しと爲し、強暴の座を近づけ、自から象牙の牀に臥し、寢臺の上に身を伸し群の中より羔羊を取り、圈の中より犢牛を取りて食らひ、琴の音に合せて歌ひ噪ぎ、大杯をもて酒を飲み、最も貴き香油を身に抹り、ヨセフ（國民）の艱難を憂ひざるなり（亞摩士書六章三―六節）、

若し滅亡前のイスラエル國と日本の今日とを比べて見んと欲するならば茲に最も適切なる對句があります、

サマリヤの山（都城の在りし處）に居り弱者を虐げ貧者を壓し……汝等は義しき者を虐げ賂賄を取り、門（裁判所）に於て貧しき者を推し枉げ、……彼等は義者を金のために賣り、貧者を鞋一足のために賣る、彼等は弱者の頭に地の塵のあらんには之をさへも喘ぎ求ひ（即ち毫末までも取らずば止まずとの意なり）（以上諸節亞摩士書に散見す）、

是れは今より二千六百年前イスラエル王國滅亡前の實況でありましたが、今明治の三十六年私共の目前に預言者の言葉其儘が事實となつて現はれるのを見ます、耳を開いて能くお聞きなさい、是れは明治三十五年日本の帝都を距る遠からぬ所であつたことであります、

去月（十二月）廿九日栃木縣佐野稅務署が安蘇郡植野村大字舟津川栗原長藏の明治三十五年度地租三十七錢二厘滯納に對して執行したる財產差押の結果を聞くに、差押金品は茶縞小兒物綿入一枚、双子縞男羽織一枚、無地紺縞一反、通貨金十八錢なるが、其衣類は鑛毒救濟婦人會より惠まれたるもの、又其通貨は過般風水害の節天皇陛下より御下賜ありたる御救恤金を神棚に上げて日頃拜み居りしものなりと（萬朝報所載）、

イスラエル國もユダ國も其公吏の暴虐が其一つの原因となりて立派に滅びましたが、日本國も同じ罪惡を犯して亡びない理由は何處にありますか、足尾銅山鑛

毒事件など丶云へば今では我國の基督教の教師までが一笑に附して了ひますが、然し此事件は是れ日本國全體の疾病が此所に惡い膿物のやうなものと成つて發したものでありまして、日本國が如何に危險の地位にあるかは鑛毒事件を見て最も良く察することが出來るのであります。滅亡です、日本國の滅亡は決して空想ではありません、○○○のやうな法螺吹が大政黨の首領であり、其下には俗物が群を爲して國政を弄んで居るのであります、政治的の日本に一縷の希望のないのは決して怪しむに足りません、故に眞正の憂國者は預言者エレミヤの言を藉りて泣くのであります、

あゝ我れ我が首を水となし、我が目を涙の泉となすことを得んものを、我が國民の燼滅を思うて我は晝夜哭かんものを（耶利米亞記九章一節）。

後は唯一擊であります、此海軍が無くなれば日本國は無くなるのであります、此陸軍が無くなれば迹には國家らしき國家はないのであります、國民的理想の

あるのではなく、深い高い聖い希望と歡喜と生命とのあるのではありません、實に心細い極ではありませんか。

斯く觀じ來りますれば私共はほや既に亡國の民であるやうに思はれます、私共は唯僅に私共の靈魂丈けを救ひ、此扶桑の國は之を其運命の成行に任かし、其滅亡を傍觀しなければならないやうに思はれます。

然しながら斯くも眞暗の中に亦大なる希望があります、我等は此暗黑の中に在て預言者イザヤの言を藉りて叫びて言ひます、**今は困苦を受くれども後には闇なかるべし**と（以賽亞書九章一節）、成程暗黑は暗黑であります、然し其暗黑は外面の暗黑であつて、中心の暗黑ではありません、社會の暗黑、政治の暗黑、教育の暗黑、文壇の暗黑、官吏の暗黑、僧侶の暗黑、富者の暗黑でありまして神と國土と平民との暗黑ではありません、腐蝕は常に復活を意味するのであります、まして、日本國現時の腐敗は其復活の兆候であります、今は其死すべきものが

死しつゝあるのであります、其支那人より學び來りし忠孝道德、其上に建設されし制度、文物、教育、……是等が今崩れつゝあるのであります、即ち東洋的の日本の秋が來たのでありまして、其葉と枝とが枯れつゝあるのであります、然し其落ちたる葉の跡には既に春の新芽が出來て居ります、我等は決して失望してはなりません。

我等の愛する此日本國に關する我等の希望は第一に神の本性に在ります、神は正義の神、仁愛の神でありますから其神の造られた此日本國は何時迄も不義の器となりて存るべき筈のものではありません、日本國が藩閥政府の日本國、進歩黨政友會の日本國であると思へばこそ失望するのであります、然しながら富士山は決して〇〇伯の築き立てたるものではなく、琵琶湖は〇〇侯の鑿つたものではありません、此日本國は正義の神が正義を行ふために造られたものでありますから、此國に於ても正義は必ず行はるゝに至ります、汝等曩より氣息の

出入する人に倚ることを止めよ、斯る者は何ぞ數ふるに足らんや（以賽亞書二章末節）、政治家や、教育家はいくら腐つてもまだ失望するに足りません、我等は正義の神の造り給ふた此國土に住居つて居る者でありますから、我等の理想の行はるゝ日は必ず來るに相違ありません、此事は餘りに能く分かり切つたる事で特別に述べ立てる必要はないやうではありますが、然し私共の度々忘れる事でありまして、私共が度々之を記憶に喚起すの必要ある事であります、私共が人より、政治家より、上流社會と稱して道德的には實は人類の最下等の社會の人々より、清淨と潔白とを得んと欲するからこそ失望するのであります、若し人より望むを止めて神より望みますれば我等の心には希望は恒に滿々たる筈であります。

日本國に關する我等の希望の第二は其人民に在ります、日本國の政治は甚く腐りました、其宗教も教育も頼むには足りません、然し日本人なるものは著しい

人民であります、私は國自慢から此事を云ふのではありません、其二千年の歴史が其優等なる民たるの最も明白なる證據であります、日本國の歴史は名譽ある歴史であります、爾うして其名譽たるや今の多くの我國の歴史家がいふやうに二千年間一系の皇統を維持し來たから計りではありません、日本歴史の名譽たる所以は其進歩的、自由的なるに因ります、日本人は善を見れば終に之を採用せずには止みませんでした、彼等は自國の文字を捨て其時代には最も優れた支那の文字を採用しました、彼等は多くの反對ありしにも係はらず、終に異國の佛敎を採用しました、皇室に對しては甚だ忠良なる民ではありましたが、然し時勢の必要とあれば北條氏のやうな有爲なる政治家を戴きまして之に二百年間の國政を任したこともあります、日本人は島國の民ではありますけれども島國を以て滿足する者ではありません、彼等の企圖は常に大陸的であり世界的でありまして、機會の乘ずべきがあれば彼等は常に世界に向て伸びんと致しまし

た、故に彼等は新たに西洋文明に接しても少しも驚きませんでした、彼等は直に其吸收と消化とを始めました、彼等は幾年ならずして西洋人が幾百千年かゝつて發明した機械を獨りで運轉し始めました、彼等は亦た西洋の自由思想に對して非常の羨望を表しました、故に保守的の政治家が出でまして種々の手段を用ゐて彼等の自由思想を抑へやうと致しましたけれども、然し彼等は到底之を抑へ切れませんでした、自由と進歩とは日本人の特性であります、彼等は時には欺かれて壓制に甘んじますけれども、然し是れは決して長いことではありません。

聖德太子を出し、空海上人を出し、北條泰時を出し、蓮如上人を出し、豐臣秀吉を出し、錢屋五兵衛を出し、渡邊華山を出した日本人は實に偉らい人種であります、此人種は世界に大事業を爲すの資格を備へた人種であります、此人種が何時までも今日のやうな壓制の下に沈んで居やうとは如何しても思はれませ

ん、彼等は遠からずして壓制の繩を斷ちます、彼等は終には世界の最善最美のものを我が有となさずには止みません。

日本國に關する私共の希望は第三に其國土に在ります、其地位は其人種と共に其天職を示します、日本國は世界の一半を他の一半と結び付けるための偉大なる天職を帶びて居ます、日本國は亞細亞の門であります、日本國に依らずしては支那も朝鮮も印度も彼斯も土耳其も救はれません、人類の半數以上の運命は日本國の肩に懸つて居ます、此國は是れ少數の貴族や商人や政治家の貪婪を充たすために造られたものではありません、日本國は支那の四億餘と印度の二億五千餘萬と其他大陸の億兆を救はんために造られたる者であります、斯かる重大なる天職を帶びた國が今日のやうな實に醜猥極まる狀態に何時までもあらうとは如何しても思はれません、日本國の希望は其天職に附帶して居ります、富士や鳥海や淺間が空天に向て聳ゆる間は日本國の未來は確かであります、利根

や千曲に水の流れる間は日本國の希望は溢れて盡きません、世界は日本國に向て革命を要求して居ます、爾うして藩閥の政治家や僞善貴族は如何に有力なるも此要求を拒むことは出來ません、日本國は遠からずして世界の大光を迎へます、日本國も久しからずして匈牙利と同じく黃色人種の基督教國となります。

爾うして今や此希望は充たされつゝあります、外部の壓制の甚だ强きにも係はらず、大光は此國土に臨みつゝあります、政府の人の見ざる所に於て、貴族輩の夢にも見ざる境遇の中に、其僞善的社會には喇けられながらも、純潔の日本人は徐々として大光を迎へつゝあります、日本人は支那人とは違ひます、日本人は政府の勸誘に從つて宗教を信じません、又外國宣教師に尾從して其安心の基礎を定めません、日本人は自由に自由宗教を信じます、政府にも依らず、外國宣教師にも賴らず、日本人は自身勝手にナザレのイエスを主として仰ぎつゝあります、北は宗谷の海に氷塊が群をなして寄せ來る邊より、南は安平恒春の

野に熱帶植物の繁茂する所に至るまで、此所の海邊、彼所の山里に、正直にして國を愛する日本國の平民が自由の主なるイエスキリストの名を顧びつゝあります、政府でいくら法令を出しても此教化を妨ぐることは出來ません、今や忠君愛國を唱へし教育家が珠數繋ぎとなりて獄舍に投ぜられつゝある間に純潔無垢の日本武士は聖潔の主を求めつゝあります。

今は微々たる少數であります、然しながら此少數の中に日本國の希望は存して居ります、既に彼等は日本國の精神となりつゝあります、其國民歌は將に彼等に依て歌はれんとしつゝあります、其政治さへも彼等に依てのみ多少の清潔を維持されつゝあります、其慈善は殆んど總てが彼等に倣ひつゝあります、然しながら未來の彼等の勢力たるや決して今日の如きものではありません、此社會制度が腐れ盡きて後に、或は其外形的國家が一時其存在を失つて後に、雲となつて起り、龍となつて立ち、終に此國を永久の基礎の上に据ゑ、日本國をして、

西洋と東洋とを繋ぐに至らしむる者は實に彼等であります。

然かし多分私は私の肉眼もて此喜ばしき時を觀ることは出來ますまいと思ひます、私は矢張り嘲笑罵詈の裡に私の一生を終るのでありませう、然しながら私は此短かき私の生涯を此日本國を永久に救ふ其準備のために費すことの出來たのを非常に有難く感じます、私は實に世の人が想ふやうに絶望の人ではありません、私は希望を以て種を蒔いて居る者であります、私は實に私の愛する此日本國と偕に救はれつゝある者であります、基督の爲め、國の爲め、私に若し千度びの生涯が與へられますならば、私は總て之を此二つの愛すべき名、即ちイエスと日本との爲めに費さうと欲ひます。

（明治三十六年二月）

基督信徒と社會改良

吾等が社會改良に從事するのは何にも此社會を改良するにあらざれば吾等に他に居る社會がないからではない、吾等の國は天に在るのであつて、吾等は最早此世の者ではない、吾等の希望も榮光も幸福も總て來らんとする基督の王國に在るのであるから、吾等は別に善きものを此世から望む必要はない、吾等基督信者は決して世の所謂不平家ではない、吾等は政權が欲しいとて決して謀叛を企てない、吾等は金が欲しさに富の平分や社會主義を唱へない、吾等には世の人の推量する能はざる歡喜と滿足とがある、故に若し吾等自身のために計るならば吾等に別に此社會を改良するの必要はない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

成程此社會には辛らい苦しい事が澤山あるに相違ない、然し吾等は幸にして基

督を信ずる事が出來た、爾うして彼を信じて死ぬことさへも左程怕ろしい事でないやうになつた、況して貧をや、無位無官をや、幸にして眼は瞽せずして宇宙の莊美を窺ふ事が出來、幸にして耳は聾せずして禽鳥の樂を聞くことが出來る、手足は勞働に堪へ、胃と腸とは消化を能くす、基督を信ずるに至て貧しき卑しき此生涯は樂しき嬉しき者となつた、吾等何を好んで社會改良者たらんや、吾等自身に取りては惟だ感謝と喜悅とあるのみである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

故に此世に於ける吾等の重なる事業は此希望、此歡喜、此滿足、即ち此福音を吾等の同胞に傳ふることである、是が人類の生命であるから是を與へずして眞正の慈善なるものはない筈である、若し人生の終局の目的なるものがあるならば、夫は福音の宣傳であると思ふ、金を儲ける事でなく、亦學者となつて知識に誇ることでもない、富も權も智も皆なイエヌキリストなる言ふべからざる神

の恩惠を同胞に頒與する爲のものである、傳道と稱へば詰らない仕事の樣に聞ゆれども、然し其は敎會の會員を殖さんと焦慮る世の所謂傳道を稱ふのであつて、人を生命に導く眞の傳道をいふのではない。

＊　＊　＊　＊

然し吾等は傳道の他にも社會改良に從事する、而も最も熱心に、又世の人に率先して之に從事する、社會改良は吾等の本職ではないが、然し吾等獨特の仕事である、此世を重せざる基督信者が最も有力なる此世の改革者であるとは逆說の如くに聞えて實は最も著明なる事實である。

＊　＊　＊　＊

社會改良は善事である、善事であるから吾等は之に贊成して亦身親からそのために盡力する、吾等は聖書の明白なる敎訓に從て此事の爲に盡力する、腓立比書第四章の八節に斯う書いてある、

兄弟よ、凡そ眞實なること、凡そ敬ふべきこと、凡そ公義きこと、凡そ清潔き事、凡そ愛すべき事、凡そ善稱ある事、凡て何なる德、何なる譽にても爾曹これを念ふべし、

世の善事に對ては滿腔の同情を表するのが基督信者の特性である、「吾は基督信者なり、故に人類に關することにして吾の注意を惹かざる者なし」とは或る中古時代の聖者の言ふた事である、吾等は吾等と宗敎を異にする者の發起に係りたればとて世の善き事業に向て反對を表しない、何人に依て發起されても宜しい、總ての善き事業は吾等の贊成を要求する價値がある、吾等は基督の忠實なる僕として總ての善事に向て厚き同情を表し、そのために盡瘁するの義務を有つ。

＊　＊　＊　＊

然し義務の念から計りではない、吾等は亦同情推察の念から社會改良に從事する、世には吾等の有つやうな天國の希望を有たない者が澤山居る、即ち此世の

所有の不足なるより心も亂れ想も壓せられ、不滿慷慨遣る方なく、惟鬱々として此短き生涯を送りつゝある者が澤山居る、勿論彼等とても靈魂を有つ人間であるから衣食が足りたればとて心の滿足を得ることの出來る者ではない、然しながら境遇の苦痛が彼等に天の光明を遮る一つの重なる原因であることを知れば、吾等は努めて彼等の境遇の改善を計り、彼等が身に餘裕を得るに隨て心に天の慰藉を求むるに至らんやう、吾等は彼等の爲に盡さんとするのである。

＊　＊　＊　＊　＊

それ許りではない、社會改良は神の聖旨である、「聖旨の天に成る如く地にも成させ給へ」とは吾等の日々の祈禱である、「萬物の復興」と稱へて此地上に於ける人も物も皆な悉く神の聖旨に適ひて調和の完全に達せんとは、神がその豫言者等に由て吾等人類に約束し給ひし所であつて、吾等は幾分なりとも、何れの方面からなりとも此完成を贊くべきである、萬物の復興(Restitution of all things)

とは勿論宗教の復興に限らない、之は政治も教育も實業も美術も、人類に關する總ての事の復興を含んで居る、勿論眞正の改革は衷より始まる者であつて外より來るものではないから、社會改良と稱して多くは外より爲さんとする改革の到底永久的のものでない事は善く分つて居るが、然りとて外よりするの改革も亦多くの場合に於ては內よりするの改革を助くるものであるから、假令皮相の改革であるとは知りつゝも吾等は熱心に其實行を計るべきである。

＊　＊　＊　＊　＊

西洋の諺に Cleanliness is next to godliness 之を譯せば「清潔は神聖に次ぐの美德である」と云ふ事がある、即ち內に聖い者は外にも亦た清からざるを得ないといふ事である、吾等心に聖き神を認めて、吾等の周圍の不潔に堪へられなくなる、賣婬、賄賂、强飲、爭鬪等は吾等の性質に訴へて耐へられなくなる、基督教は酒を飲む事を以て罪惡とは認めない、然し基督を信じて酒を飲んで醜態を

演ずること等は全く出來なくなる、吾等の靈魂と肉體とは二つ全く別物ではないから、靈魂が淸まれば肉體も自づと潔まるのは當然である、故に基督信者が社會改良に熱心になるのは自然の勢であつて、彼は敢て義務に强ひられて之を爲さんとするのではなくして、彼の性質が彼をして之を爲さしむるのである、基督を信じて家庭が淸まるのみならず、其中に飼ひ置く所の犬猫までが何んとなく狂猛の性を脱して柔和の性に立戻るは吾等のよく注意する事實であつて、社會に基督信者が出來て其風儀の多少改まらない事は決してない筈である、基督信者は實に改革者である、即ち改革者たらんと努めずして世を改革する改革者である、爾うして世に實効多き改革者にして基督信者の如きはない。

* * * * * *

社會改良は基督信者の道樂の一つである、彼は義務に驅られて慈善事業には從事しないが、慈善は彼の最も恥けり易き道樂の一つである、有名なるジョン、

ハワードは監獄改良は彼の道樂(hobby)であると云つたさうだが、實にさうであつたらうと思ふ、既に神より永生の希望を賜はりて吾等は此世に在て吾等の同胞の爲に何にか善き事を爲さずには居られなくなる、吾等は所謂脾肉の歎に堪へなくなるのである、此溢るゝ計りの歡喜、吾等は之を何處かに於て散せなければ耐へられないのである、故に吾等は悲哀に沈める吾等の同胞の幸福を計て吾等の心中の喜悅の壓迫を減さんとするのである、基督を信じて善事を爲さざるが如きは到底堪え難い事である、吾等は此事を稱して「信仰の行爲」と云ふ、是は殆ど世人の推量以外にある能力であるが、然し其効力の確實なることは吾等基督を信ずる者の何人も疑はない所である。

* * * * * *

斯う云ふ譯であるから、吾等が社會改良事業に從事するのは之を吾等の傳道の方便に用ひんとするのではない、傳道は前にも曰ふた通り吾等の最大目的で

あるが、然し之を爲すに方て吾等は別に社會改良に從事するの必要はない、否な、多くの場合に於ては慈善事業の如きは純粹なる傳道の妨害をなす者である、基督に由て肉體を養はれし四五千人の人等は彼が彼等に與へんとせし眞理を求めんとはせずして反て彼に取てはいと小なる慈善なりしパンの施與に與からんとした、世人の多數に取ては財界不振の挽回は眞理復興に優るの幸福であるから社會改良は眞理傳播に優りて彼等に歡迎せらるゝに相違ない、故に吾等は社會改良に從事するにも大に注意しなければならない、基督教が社會改良と化した時はその大に墮落した時である、即ち我國今日の基督教の如きものであつて、希望もなく、歡喜もなく、乾燥無味、味を失ふた鹽のやうな無味無能の者である、基督教の社會改良は無意識的の者でなくてはならない、即ち右の手の爲す事を左の手に知らざらしむる底のものでなくてはならない、基督が盲者の目を開き、跛者の足を立たせた後に此事を人に告る勿れと嚴しく命じ

給ひしは全くこのためである、社會改良を以て傳道の一つの方便と見做す者の如き、未だ基督教の何たる乎を知らない者である。

＊　＊　＊　＊　＊

政治、法律、文學、美術、殖産、工業等、何んでも來れ、吾等は及ぶ丈けの力を其發達に注がん、然れども吾等の生命はそんなものゝ中にあるのではない、政治は吾等に取ては最大事件ではない、基督信者の一人が衆議院の議長に選れたればとて左程感謝すべき事ではない、感謝すべきことは神の子が此世に降り來りて吾等人類のため贖罪の血を流し給ふたと云ふ事である、吾等の生命は是であつて、其他の事は吾等に取ては細事である、然し吾等は此世に生れ來りし序に感恩報謝の餘り樂しみ半分に吾等の能力のあらん限り吾等の同胞のために其澁苦の幾分なりとを拭はんと欲するのである、基督信者の社會改良とは斯う云ふ精神から出るものであると思ふ。

（明治三十四年九月）

聖書の研究と社會改良

聖書は甚だ古い書であります、其最も新しい部分と雖も今を去る千八百年程前に書かれたものであります、爾うして斯くも古い書が現在の世を改良するに力があると言ふのであります、私は茲に難題を設けたやうなものであります。

若しマーシャルの『經濟論』が現時の社會改良に益があり、カール・マルクスの『資本論』が勞働問題の解決に効があると申しますならば、誰も直に之を肯ひませうが、然しながら千八百年以前に成つた書が今日尚ほ吾人の社會を改良するの力を具へて居ると申しまするのは、何やら荒唐無稽を語るやうに聞えます。

夫れ故に私の如き者が目下專ら聖書の研究に從事して居りますれば多くの人は種々の批評を加へて私を嘲ります、或人は私は世に當るの勇氣がないから古典

の背に匿れるのであると申します、彼等は私に聖書先生の名を與へて呉れまして、私を腐れ儒者の一種と見做します、又或る人は私は道樂のために古典の研究に從事するのであると思ひます、即ち聖書の研究は骨董を弄ぶが如き者でありまして、別に害はなき事なれども去ればとて此活世界に必要のものではないと思ひます、故に或る有名なる社會改良家の一人は私の事業を評すると同時に申されたさうです、即ち「今は聖書を棄てゝ起つべき時である」と、即ち今や國家滅亡に瀕して居る此際聖書の研究などに從事する時ではないと申されたさうであります。

成程或る場合に於ては爾う云ふ考への起るのも無理ではないと思ひます、世には無益なる聖書の研究がありますと、即ち骨董的の聖書の研究があります、即ち聖書時代の風俗習慣を探ると稱し、又は其制度文物を究むると唱へまして、聖書を以て考古學の教科書のやうに心得まして其研究に從事する者があります、

或は近來世に稱する高等批評なる者は聖書を聖い書と見做さないでたゞの古い書と思ひ、其記事を分析し、之を取壞して又立直さんとし、或はアブラハムは實在したと云ひ、又は想像的人物であると云ひ、或はヤコブは月神の具體であつて、彼に十二子ありしは年に十二ヶ月あるを示し、彼に五人の妻ありて七十二人の孫ありしことは五日を以て一週に算へし週間が七十二回續いて一年即ち三百六十日を作ることであるなどゝ申します、聖書も斯う云ふ風に研究されますれば至て面白いものゝやうでありますするが、然し若し是れが聖書であります るならば聖書とは志士が世に處するに當て必要なる書であるとは思はれません、若し是れが聖書の研究でありまするならば之を棄て起つのが吾人今日の爲すべき事である乎も知れません。

又世には之と正反對の聖書の研究がありまます、即ち別に其文意組織等を究むることなく、只盲滅法に之は神の辭であると信じ、其中に一點の錯誤なきと信じ、

其言にさへ賴れば何事も明瞭になるやうに思ふて、たゞ其章句を引照して事物の解釋を試みんとする者があります、然しながら私共は之を稱して聖書の研究とは申しません、是れは聖書の諳誦であります、其研究ではありません、若し聖書は之を諳誦して事の了むものであるならば、私共は何にも骨を折つて其研究に從事する必要はありません。

聖書の研究とは聖書の文學的解剖でもなければ亦考古學的考證でもありません、然ればとて其盲目的諳誦に研究の名を下すことは出來ません、聖書の研究とは聖書を其始めより終りに至るまで一貫する或る一種特別の精神を發見することであります、其記載する事項は一人種と一地方とに關したる事でありますが、然しながら此事項に由て顯はれたる精神は實に神の奥義でありまして、是れは世と共に移る者でなく、是は往昔も今日も人を救ひ、社會を改むるに効力の著しい者であります、聖書の研究とは創世記の始めより默示錄の終りに至

るまで其中に含まれてある所の一種異樣の人生觀の探究を目的とするのであります、爾うして斯かる研究は今日に於ても決して無益ではありません。

聖書を眞正に研究した事のない人は斯くも貴い、斯くも珍らしい眞理が斯も古い書の中に存在して居ると聞いて之を疑ひます、聖書は今日の處では至て普通の書でありまして、何れの古本屋に行ても些少の金を投ずれば購ふことの出來る書であります、斯くも價値のない、斯くも有觸たる書の中に斯くも貴い眞理があらうとは誰も思ひません、然しながら私共今日此舊古い書を手に取て其中に伏在して居る所の眞珠の如き眞理を發見しました時には丁度コロムブスが初めて亞米利加大陸を發見した時のやうに悅ぶのであります、即ち聖書に記いてあります通りに此天國の眞理は畑に藏れたる寶の如く人之を看出さば之を秘し喜び歸りて其所有を盡く賣りてその畑を買ふやうなものであります（馬太傳十三章四十四節）、是は實に古い新い眞理であります、是は保羅、彼得、約翰の眞

理ではなくして、是は私の發見した眞理でありまして、私自身の眞理であります、ルーテルのやうな人が聖書を自分の胸に當て是れ我が書なりと叫びましたのは決して理由のない事ではありません、此在觸たる書に此新らしき眞理を發見して私共は足の下に珍寶を發見した樣に喜ぶのであります。

偖、社會改良とは何でありまするか、今日社會改良と申しますれば隨分漠然たることを言ふのでありまして、多くは是れ弊風排除、罪惡剿滅に外ありません、然しながら社會の罪惡は之を摘發し之を詰責すればとてそれで社會が改良されるものであるか、是れ大なる疑問でありまして、實際此事に當て居る人も斯かる改良法に多くの信用を置いて居らぬやうに見えます、罪惡は道德的疾病でありますから外より之を切斷して必しも癒ゆる者ではありません、社會とは多くの人が考ふる如き單純なる組織體ではありません、隨て社會的罪惡の如きも之を責め立てたばかりで正すことの出來るものではありません、社會改

良は至て易いやうで實は最も困難なる業であります、是を行ひまするには多くの勇氣を要しまするのみならず、亦深き智慧と強き能力を要します、直に人の良心を改良するにあらざれば社會の罪惡は拭へるものではありません。

曾て或る辯士が此高壇から演べられましたが、種々雜多の社會の罪惡も之を詮じ詰めれば二個の罪惡に歸するのであります、即ち利慾と好色の二つに歸着するのであります、故に若し何にかの方法を以て此等二個の罪惡を其源に於て涸すことが出來ますれば、是れ社會の罪惡を其本に於て絶つことであるに相違ありません、而して若し此病根を絶たずして、いくら其結果を責めた所が、是れ單に一時を繕ふに止て永久の治療でない事は誰も能く知つて居ます、如何して人の利慾と好色の念を潔めることが出來る乎、或は是れ實際出來得る事であるか、是れ大に私共の攻究すべき問題であります。

若し利慾は人の固有の性であつて、之を絶つことは到底出來ない、即ち人は利

慾的動物であつて、彼より利慾を絶つは彼を殺すに均しなど云ふ人があります

れば其人の社會改良なる者は甚だ覺束ない者であると思ひます、然しながら多くの人は殆んど之に均しき人生觀を懷きながら社會改良を喊んで居るやうに思ひます、即ち人を利慾的動物と見做して、一の利慾を抑へるに他の利慾を以てし、即ち利益の調和を計て世に平和を來らせんとして居る人が世間普通一般の政治家や憂國家と稱へられる人等であるやうに思はれます、然しながら斯の如くにして成つた平和は極く皮相の平和であることは誰にも能く解ります、軍隊と巡査と法律とを以て維持されて居る平和は實は平和ではありません、是れは何時破裂するか知れない平和であります、斯の如き狀態に在る社會は危險極まる社會でありまして私共は之を以て到底滿足することは出來ません、若し平和が平和ならば是れ人の心の中から起つた平和でなくてはなりません、利慾其物を斷つにあらざれば社會の眞正の平和は望めません。

茲に於て聖書の吾人に傳ふる社會改良法の實に非凡卓越にして到底人智の思ひ及ばざる所のものであることが解ります、聖書は利慾の存在を認めます、亦その社會の爭亂腐敗の主なる原因の一であることを認めます、然しながら此事を認むると同時に又此罪惡の怪物を討伐剿滅するに足るの能力を私共に與へます、聖書は利慾を以て殺し難き敵であるとは信じません、聖書は利慾に勝る强き能力を私共に與へまして、私共を利慾以上の人と成します、聖書に依てのみ私共は眞正の無慾の人と成ることが出來ます。

聖書は人をして其利慾の念を絶たしめ、之に代ふるに他を救はんと欲するの聖慾を以てして社會を其根柢より改めます、爾うして私共は世に此事を爲し得る勢力は聖書の基督教を除いて他に決して無い事を信じます。

利慾を殺ぎ之を聖化するに此くも偉大なる効力を有する聖書の教訓は利慾の姉妹とも稱すべき好色の罪惡に對しても同一の權能を揮ひます、能く人の稱ふる

所でありますが若し世に婦人なる者がなくば世に罪惡なる者はあるまいとの事であります、西洋でも日本でも同じ事でありまして、モラリチー又は品行と申しますれば曰はずして男女の關係を指して言ふのであります、品行方正なる人とは盗まない人、友を陷れない人などを指して稱ふにはあらずして、男女の關係の清い人を謂ふのであります、此世の罪惡は總て此關係の紊れるより素まる者でありまして、若し此關係が清潔であり、神聖でありますれば罪惡は其泉を絶たれたと言ふても宜う御座います。

若し此事を疑ふ人がありまするならば今日世の人が絶叫して止まざる社會的罪惡の一二に就て考へて御覽なさい、かの目下の社會的罪惡の首とも稱ふべき足尾鑛毒事件に就て考へて御覽なさい、濃良溺川沿岸十數萬人の家を壞ち食を奪ひ、其辜なき嬰兒の乳汁までを涸らせる者は何でありますか、是れは勿論足尾の鑛山より流れ來る銅毒砒毒であるに相違ありませんが、然し、此鑛山を掘り

又掘らしむる動機は何處にありますか、鑛毒の奥に更に鑛毒よりも更に激甚なる害毒があるのではありませんか、是れは山から出る毒ではなくして、人の心に湧き出づる毒であります、是は日光山脈に潜む毒ではなくして、東京の中央に於て醸されつゝある毒であります、若し何にかの方法を以て東京に於ける此害毒の源を絶つことが出來ますれば足尾の鑛業は當日の中に停止されまして、幾萬の民は倏にして餓死の恐怖を撤去するに至りませう、足尾鑛毒被害問題とは實は婦人問題であると申しましたならば人は之を一笑に附しませうが、然し罪惡の泉源の何處に潜伏し居るかを能く知る者は此事を聞いて決して怪みません、清い家庭に棲むで居る者は數萬の人の家庭を破壞するやうな事業に安閑として從事して居ることは出來ません、愛情が腐れて家庭は紊れ、家庭が紊れて邪慾益々增長し、其結果姪縱となり、放埒となり、終に冷酷なる心情となりて茲に前代未聞の悲劇を演ずるに至つたのであります。

若し帝國三百の代議士が皆な悉く一夫一婦を實行する人でありまするならば議會今日の腐敗は私共の耳にする所でないに相違ありません、日本國の社會を其根柢に於て濁す者は腐れたる政治家輩の腐れたる心情であります、國家に對する彼等の觀念が卑陋なるのではありません、神の遣り給へる最も神聖なるべき婦人に對して彼等既に陋劣を極むる念を懷く者でありますから、總てのものに對する彼等の眼識が陋劣になるのであります、佛國革命時代の偉人ミラボーが幾回か歎じて申しました、「我に國家を濟ふの大抱負大經綸ありと雖も之を決行するの確信なし」と、蓋し彼は婦人に對して清淨い人でありませんでした故に彼は何物かゝ彼の胸中に在て彼の信念を抑壓するのを覺えたのであります、心情に於て汚れたるミラボーは大經綸を抱きながら彼の愛する佛國を濟ひ得ずして空しく不歸の客となりました、妻女の事是れ私事のみなど唱ふる日本國の政治家等は未だ人生の何たる乎を知らない人等であると思ひます。

情愛の事は決して私事ではありません、總ての高貴なる總ての莊嚴なる思念は此泉より流れ出る思想の水を以て養はるゝ者であります、今日差したる害なしとて穢き小說に眼を曝す者は其害毒を非常に悔ゆる時が來るに相違ありません、情愛に於て潔からずして吾等は勇敢なる事は出來ません、雄辯なるものは確信の發現であります、情愛の潔からざる所には確信がありません、故に雄辯なる者はありません、一夫一婦の法律案の提出さるゝ度毎に之を一笑に附して議題とも爲し得ざる我國の議會に雄辯なる者の絕えて無いのは決して怪しむに足りません、清淨なる思想を勇ましく演べるのが雄辯であります、既に勇氣なく、又清淨雪を欺くの思想なき我國今日の政治家の口より世界に響き渡る雄辯のなきは決して怪むに足りません。

如何にして學生の品行を取締らんか、是れ目下敎育上の大問題であります、品行は規則を以て取締ることの出來るものではありません、大家の格言を幾回讀

み聞かしても心情を潔めることは出來ません、御覽なさい我國學生の腐敗が過去十年間絕えず唱へられたるに係はらず、其墮落は日々に益々甚だしいではありませんか、國家の經綸を口にし、社會の改良を絕叫する學生の口より度々漏れ出る姪話なる者は何を示しまするか、是は彼等の心の奧底に潛伏する腐敗の空氣を洩す者ではありませんか、清き青年と汚れたる青年とは是で分るのであります、試驗毎に好成績を奏する者が好青年ではありません、其唇に曾て汚穢の言葉の浮び出しとなく、若し過つてその之に觸るゝことあれば赧顏羞恥、措く所を知らざる者が吾人の望を囑すべき青年であります、而かも斯の如き青年は今は何處に居りますか、都下幾萬の青年は此羞恥の感覺に於て過敏なる者でありますか。

茲に於て又聖書研究の必要が來るのであります、曾て詩人ローエルが申しました通り、基督敎に依らずしてデセント（端正）なる社會の成つた例はありませ

ん、成程言語、動作、衣裳等に於て禮儀正しき社會が基督教なくして出來た例はあるかも知れません、然しながら邪念を全く其原に於て絶ち、謹んで之を語らざるにあらずして、語るべき思念なきが故に語らないやうな、爾んな社會は未だ曾て基督教の感化力に依らずして成つた例はないと思ひます、その扮裝の立派なるは其人が眞正の貴女であり、紳士であるの證據にはなりません、多くの場合に於て私共は最も嚴めしき紳士が實は禽獸にも劣る人である事を發見するではありません乎、天の使をも欺くやうな貴女にして腐敗の塊に過ぎない者を私共は度々目擊するではありませんか、聖書の傳ふる基督教の注入を俟つて裏心よりする紳士淑女は初めて世に顯はれるのであります、此事に關する基督教の効力は實に世界無比であります。

札幌農學校前校長故ウイリヤム・クラーク氏は曾て故黑田清隆伯より學生の品性養成を託されました時に、彼等に基督教の聖書を敎ふるより他に途なき事を

以て答へました、爾うすると黑田伯は大に驚かれまして、耶蘇教を傳ふるより他に德性を養ふの途がないとは奇怪千萬である、其事のみは贊成することが出來ないと申されましたら、クラーク氏は之に答へて「然らば私は學生の德性養成の任に當ることは出來ません」と申して、儼として其說を取て動きませんでした、而かして數週間を經て後に長官黑田伯は終に其說を讓られ、クラーク氏に聖書の教授を許されましてより札幌農學校に於ける基督教の信仰なるものは初まつたのであります、クラーク氏が固く其持說を取て動かざりしは之に深い理由があつたのであります、即ち品行を其源に於て正さんと致したのであります、爾うして

私共氏の教育に與つた者は氏が先づ第一に學生の情愛を潔めんと致したのせん、私共はクラーク氏より靈魂の治療に與かつたのであります。

聖書に顯はれたる聖き神に接して邪念は私共の心より燒き拂はれます、基督

なる神の自顯を仰ぎ見まして、汚穢の念は意はずして私共の心より消えて了ひます、聖書は總ての點に於て私共を潔めまするが、殊に人力の到達するに最も困難なる人の情愛に立入り、彼を其處に潔めまして、社會の害毒を其根本に於て絶ます、是れは基督教獨特の功績でありまして、此事の出來る宗教も哲學も他には決して無いと信じます。

使徒パウロは申しました、「我は福音を恥とせず、其は此福音はユダヤ人を始め、ギリシヤ人、總て信ずる者を救はんとの神の大能なればなり」と、私も亦パウロの說いた此福音を載せて居る聖書の研究に就て恥と致しません、何故なれば是れ社會を其根柢に於て潔むる唯一の能力であると信ずるからであります、

私を嘲ける者は嘲けつても宜しう御座います、私共は空氣を擊つ樣な無益な業に從事して居る者ではありません、私に聖書を棄てよと言ふ社會改良家があつても私は之を棄てません、私は實際最も力ある社會改良に從事して居る

のであると自から信じて居ます、私の社會改良は根本的改良であります、即ち罪惡を其根より絶つ改良であります、爾うして此事を爲す大能力は此古い微さい書の中に在るのであります。（明治三十五年三月二日東京神田基督教青年會館に於て）

國は基督教なくして立つを得る乎

是れは極めて古い問題である、然かし未だ結論に達しない問題である。

單に論理の上より言へば基督教なくして國が立たないと云ふ理由はない、國は正義に據て立つ者である、爾うして正義は必しも基督教に限らない、正義は儒教にもある、佛教にもある、宗教と云ふ宗教にして正義に依て立たない者はない、基督教に依らざれば國は立たないと云ふは獨斷の最も甚しいものであるやうに聞える。

事は茲に止まらない、所謂基督教國に於て多くの不義の行はれることは最も明白なる事實である、最も醜惡なる習慣、最も殘忍なる壓制は基督教を奉ずる國に於て行はれる、之に反して多くの美德、多くの善行は非基督教國に於て行はれる、實際道德の立場より見たる非基督教國は多くの場合に於ては遙かに基督

教國の上である。

然るに基督教に由らざれば國は立たぬと云ふ、妄說も亦甚だしいではない乎。

然しながら茲に掩ふべからざる一つの奇ぎなる事實がある、それは歷史上基督教國として絕對的に亡びた國の曾て無いことである、基督教亡國史といふものは書かんとするも書くことが出來ない、國は基督教を信じて不滅となるやうに見える。

基督教國にして亡國の悲運に陷りし者として常に波蘭土國が擧げられる、成程波蘭土は三回の分割に由て紀元千七百九十四年に國として其存在を失つたやうに見える、然しながら所謂滅亡後の波蘭土人を知る者は波蘭土國の滅亡を認めない、波蘭土人は其支配人を更へたまでである、波蘭土人自身は今尙ほ獨立の民である、彼等は國語を存し、文學を存し、世界の文明場裡に立て他國の民に一歩も讓らない、若し波蘭土が亡國であると云ふならば蘇蘭土も亡國である、

洪牙利も亡國である、然しながら自治の國と成りて自治の權利を有する民は亡國の民ではない。

同じ悲運に會ひし國は南阿のトランスバールである、彼は英國の併呑する所となりて其獨立を失つたやうに見える、然しながら今日のトランスバールは前日に異ならない自由國である、之に議會がある、國務大臣がある、爾うして曾ては英國に對して劍を拔いた者が今は實際に其國務を司りつゝある、英國は南阿共和國の名を廢することが出來た、然し其自由を奪ふことは出來なかつた、否な、名義上英國の配下に屬してよりトランスバールの自由は一層鞏固なる者となつた。

其他、那威の如き、丁抹の如き、瑞西の如き、希臘の如き、幾たびか亡びんとしたが今に尙ほ亡びない、印度は亡び、緬甸は亡び、土耳古は亡びんとしつゝあるも、基督教國は其最も微弱なる者と雖も其存在を維持して居る、中央亞米

利加、南亞米利加の數多の小弱國と雖も其獨立丈けは維持して居る、是れ確かに注意すべき事實である。

之に反して土耳古の如き、其民は武にして、其宗教は卑しからざるに關はらず、其國運の日々に非なるは何人も知る所である、所謂「東歐の病人」が遠からずして其氣息を絶つに至るべしとは識者の信じて疑はない所である、彼斯の如き、近頃憲法政治を採用せしと雖も、憲法が果して彼斯國を救ひ得るや否やは大なる疑問である、埃及國は名義上の獨立國であつて、實際上英國の屬國である、摩絡哥國は其民の勇悍なるに關はらず、今や滅亡の途に就きつゝある。

以上は歷史上の事實である、議論ではない、其說明は何であるとするも、事實は掩ふべからずである。

是れ抑々何に原因するのである乎、或ひは所論基督教國なる者はすべて學術進歩の國であるが故に、彼等は近世科學に由て其獨立を維持して居るのである

乎、或ひは國も人と同じく同類相食むことを嫌ふが故に同類相憐むの情よりして基督教國は相互を絶滅に附さないのである乎、其説明は幾干もあらう、然し事實は掩ふべからずである。

國は學術に由て立つ者でない事は學術に秀でたる國の亡びたる例のあるに由て判明る、昔時のムーア人は回々教信者ではあつたが、其知識は遙かに當時の歐洲人以上であつた、彼等は四百年間今の葡萄牙、西班牙を占領した、今日の代數學をアルゼブラと云ふはムーア人の語より出たのである、化學をケミストリーと云ふも同じである、東はバグダッドより西はコルドバまで廣りてムーア人は一時は學術を以て世界に轟いた、然るに此民が終に西班牙人の逐ふ所となつたのである、爾うして逐はれて後は再び起つ能はざるに至つたのである、ムーア人は其優秀の學術を以てして其獨立を維持することが出來なかつた。

印度人は高尚なる哲學と宗教とを以て今尚ほ世界に鳴る民である、然るに此民

にして國を成すことが出來ないとは實に奇怪と云はざるを得ない、哲學若し國を成すものならば、何故に印度人は斯くまで國家的に無能である乎。

若し又國を立つるは武力に在りと云ふ者があるならば、土耳古國の衰退は説明し難き事實である、未だ曾て土耳古人に勝さる武勇の民の歴史の舞臺に現はれたる事はない、劍を以てしては歐洲人は決して土耳古人の敵でなかつた、若し武が世界を征服するの唯一の勢力であるならば、土耳古人は夙く既に世界の主人公となつて居つたであらう。

茲に於てか立國の原動力を、學術以外、武力以外に求めなければならなくなるのである、國は正義に由て立つ者である、其事は明白である、然し正義は又之を養ふに或る他のものを要求するやうに見える、所謂純正義なるものは强いやうで實は弱いものである、正義は單に主義ではない、是れは活きたる精神の活動である、爾うして活きたる精神とは活きたる人であつて、活きたる人とは其

中に在る活きたる靈魂である、活きたる靈魂なくして正義は强く働かない、道義上の正義、哲學上の正義は甚だ微弱なる正義である。

爾うして基督教が國を維持すると云ふのは此勢力を國民に供するからではあるまい乎、即ち正義をして何時までも活如たらしむるからではあるまい乎、國は衰へて、世は腐るも此勢力にして存する限りは民の復興の希望がある、壓制は如何に强くとも、腐敗は如何に甚だしくとも、正義が活きたる神より來る以上は、國に正義の絶ゆることはない、斯かる場合に於ては正義は限りなく自體を復興し、常に回春の勢力を以て腐敗せる國家に臨むのである、是れが基督教が國家を永久に保存する理由ではあるまい乎。

余輩基督教の無い文明國を見るに、其風は美にして、其俗は雅なるに關はらず、其正義は常に甚だ微弱である、或ひは利慾に驅られて、或ひは政權に怕て、或ひは正義以外の或る一種の道德に支配されて、正義は其聲を潛め、不義をして

其欲する所を行はしむ、國家存立上の危險にして是よりも大なる者はない、國民擧て僞善者となる時、馬と知りつゝ之を鹿なりと唱へ、馬を稱して馬と言ふ者に亂臣國賊の名を被せる時に國は亡びて了ふのである。

然し世には例外がないとも限らない、基督教なくして立ち且つ永久に榮ゆる國は今後或ひは世に現はれないとも限らない、其時には余輩の此主張の如きはただの一笑に附せられるまでの事である。

（明治四十一年三月）

農民救濟策としての基督教傳道

左の一編は『豐樂新報』記者より農民救濟策に就て語れとの依頼を受け、之に應ぜんために「救濟以外の救濟」と題し書いて該誌に送りし者である。

農民の救濟に就て語れとの事である、爾うして此國に於ては救濟と云へば直に經濟上の救濟のことを意ふのである、如何して農民の懷を肥さん乎、如何して彼等の借財を辨償し呉れん乎、如何して彼等に肉體的の快樂を供せん乎、是れが此國に於ける農民救濟の問題である、然かし若し是れが農民救濟の萬事であるならば余の如き者は此事に就て一言も喙を容れるの權利を有たない者である。

然しながら農民とても人間である、爾うして人間である以上は其所有を豐かにしたからとて、夫れで其救濟を全うしたと言ふことは出來ない、「人はパンのみ

を以て生くる者にあらず」と古哲は言ふた、農民の救濟を其經濟的救濟にのみ限る者は農民を非常に賤しく見る者であると思ふ。

夫れのみではない、縱令救濟が唯一の目的であるとしても、是れを經濟的方面からばかり求めても得られるものではない、人は肉體ばかりではないから、彼の肉體を滿足した所で夫れで彼は滿足する者ではない、彼に精神とか靈性とか稱ふものが存する以上は彼は亦其方面の救濟を要求する者である、亦其方面に於て健全ならざれば彼は彼の欲する此世の寶をも得ることが出來ない、亦若し得たとした所が是を有益に使用することが出來ない、故に農民救濟を經濟的の一方面にのみ限る人は經濟的にも彼等を救ふことの出來ない人であると思ふ、經濟は道德と全く分離して論ずることの出來るものゝやうに思ふた時代は既に過ぎ去つたと思ふ、有名なるアダム・スミスさへ經濟は之を道德の一部分として論じた、今の世の人が、殊に今日の日本人が、道德の經濟的能力に深く意を

留めないのは彼等の大缺點であると思ふ。

救濟なる語辭に此廣き意味を附して、即ち之を人間全體の救濟と云ふ意味に取て、余も亦此問題に關して說を述ぶるの權利を有つに至るのである、農民の救濟、如何にして農民を歡喜、平和、一致、滿足の生涯に導かん乎、是れ刻下の大問題である。

爾うして吾等の先づ第一に注意すべきことは農民救濟の方策の、人類全體の救濟法と多く異なるとなきことである、同一の方法を以て商人をも職工をも官吏をも救ふことが出來る、失望せる、落膽せる、墮落せる人に、幾干金錢を供した所が少しも救濟にはならない、殊に外より援助を供することは危險多くして益が甚だ尠ない、最も健全なる救助は其人の意志を强め彼に新希望を供し彼をして自から奮つて彼の地位を高めしむることである、是れが最も完全なる救濟であつて、此方策を以て救はれた者は終生再び死地に陷るの危險より免かるゝ者である、爾うして斯かる救濟は決して施し難い事ではない、精神一たび發して萬事を成就げた人は澤山ある、又之を世界歷史に徵するも新思想の注入に由て忽にして富强に達した國民の例も決して尠くはない、十五世紀の和蘭の如きは其一例である、英國の如き、北米合衆國の如きですら其民の富强は其國の生產力に由るにあらずして、其民の採る主義精神に由るのであることは今日の第一流の社會學者の唱ふる所である、富は力に由り、力は精神に由る、精神とは風の如きものであつて、之と富とは何の關係もないやうに思ふ人は未だ精神の何たる乎を知らない人である、精神とは世に謂ふ所の「元氣」ではない、大言壯語、是れ又精神でないことは言ふまでもない、精神とは其の眞正の意味に於て、人の眞髓に加へられし能力である、即ち靈能である、是をして發動せしむれば動となり、物となりて人類を其最も高尙なる且最も確實なる意味に於て富ますのである。

爾うして余の見る所を以てすれば日本國民の最大缺點は此靈能の缺乏に存して居る、農と言はず、商と言はず、工と言はず、官吏も政治家も文人も學者も、日本人と云ふ日本人は皆な此能力に於て缺けて居る、彼等は人の靈魂なる者は大能力の受器であることを知らない、彼等は能力と云へば金であつて、「金是れ力なり」と思ふて居る、然しながらそれは此國に於ては誰れも云ふとであるが、それは大なる誤謬である、人の力は彼の衷に存する靈能である、米國の金銀がコロムブスを驅りて彼の大發見の途に上らしめたのではない、コロンブスの靈能が彼をして數十年に渉る困難に打勝たしめて終に世界の黄金國を發見せしめたのである、靈能を有つ者は既に寶の山を持つ者である、斯く云ふは寐言ではない、人類の永い間の經驗に由て證明されたる事實である。

誰か日本人に靈能を供する者ぞ、獨逸國今日の强大を致した者は其政治家と經濟學者とばかりではない、獨逸人の閉されたる心の門を開いて其中に靈能を注

込んだマルチン・ルーテル其人が獨逸人今日の富强の基を据ゑたのである、英米兩國に於て近頃ジョン・ウェスレーと云ふ宗教改革者の誕生二百年紀が祝された、爾うして彼國に於ける經濟學者は異口同音にウェスレーの宗教改革が英米兩國の產業の進歩に偉大なる効果を奏した事を述べた、人の心を開く者は新富源を開く者である、富を國土に於てのみ求めて、之を人の心に於て求めんと欲せざる者は天が人に賜ひし大富源を捨て之を顧みざる者である。

故に余の如き經濟には甚だ暗き者と雖も、此事を知る以上は、經濟以外に於て、我が國の農民を救ふことが出來る、農民の心を拓き之に人生の新興味を供し、慈善と勞働の快樂を敎へ、地を愛し、之を天然の法則に從つて耕さしむることが出來る、爾うして是れ亦偉大なる救濟なることを誰も疑ふ者はない。

今、之を實際問題に照らして考ふるに、日本農民の大に苦痛を感ずる所のものは其家庭組織である、是れ日本人たるものゝ何人も深く感ずる所のものである

なれども、農民の如く永く其土地に土着いて居る者は一層深く之れを感ずるであらうと思ふ、親類との關係、家督制度、分家分產の習慣、佛事の施行等、田舍住ひをなさゞる者の到底推測し能はざる是等の煩雜が如何に日本の農民を苦めつゝあるか、又其ために如何に彼等の產業が妨げられ、彼等が如何程其產を無益に消費しつゝある乎は、實に農民以外の者の推測し能はざる所である、今の日本の農民に其產を增して與へた所が、彼等がそれがために益する所は至て僅少である、否な多くの場合に於ては彼等は富が增して爲めに却て多くの困難を招くに至る、彼等は何事を爲すにも親類會議なるものを開かなければならない、爾うして其親類たるや多くは舊弊保守の人であるから凡ての革新には必ず反對する、彼等は祖先傳來の財產を大事に保存するより外に家資增殖の道を講ずることは出來ない、海外移住も出來ない、農事の根本的改良も出來ない、佛事祭禮等の有害無益なる儀式習慣の廢止も出來ない、彼等は愚と知つても愚を

續けなければならない、智と知つても智を實行することが出來ない、日本農民の家族制度を改良するまでは日本農業の改良は始まらない。

日本の豪農の家に放蕩息子の多いことは實に著しい事實である、父と祖父とが一錢一厘を吝んで溜めた金錢を一夜の中に消費する者が農家の子弟の中に多き事は是れ大に世の經世家の意を注ぐべき問題である、爾うして衷心より日本の農民を救濟せんと欲する者は大に農家の子弟感化策を講ずべきである、余は一年足らずにして三千圓を田舍藝妓のために消費した農豪の息子を知つて居る、余は又息子が飲酒放埒のために全然、身體の健康を害ひ、其結果として彼を廢嫡し、他家より養子を迎へざるを得ざるに至り、終に家庭に大悶着を起し、爲めに家運を傾けた日本の農家を知つて居る、爾うして斯かる例は日本國に於ては決して尠くない、地方を遊歷して日本農家の子弟の墮落を看るに勝さる悲いことはない。

農家の救濟を言ふか、嗚呼農家の子弟を救へよ、嗚呼彼等を道德的に救へよ、彼等に智慧と德とを授けよ、彼等をして眞面目なる者とならしめよ、農家の懷を肥すに先立つて農家の子弟の濫費を止むるの策を講せよ、是れ實に救濟ならざる乎、誰か道德は農家に不必要であると言ふ乎、農工銀行の設立を主張する者は之れと同時に田舍料理店の閉店を主張すべきである、一放蕩兒は農家百年の辛苦を一夜の夢として失せしむ、そのために父は怒り、母と妻とは泣き、弟と妹と子とは迷ふ、夫れのみではない、彼の惡感化は全村に及び、青年ために浮薄に流れ、勞働ために揚らず、收穫ために尠し、余は日本農民救濟を絶叫する者の中に眼を此邊に配る者の甚だ少きを常に怪しとする者である。日本國の農業に取て最大問題とも稱ふべきものは地主と小作人との關係である。此關係の滑かならざるために農家の苦痛の十分の八は生ずるのであると思ふ、如何したならば地主と小作人とを親睦せしむるを得る乎、是れ經世家の頭

腦を絞る大問題である、小作條令の發布は恒に政治家の口に上る、地主取締の必要は社會主義者の常に唱道する所である、此問題にして解決せられずんば日本國の田畝は終に荒廢に歸し、一大爭亂は全國を通じて起り、爲めに死屍累々として全國の山野を掩ふに至るであらうとの心配は必しも杞憂であると云ふことは出來ない。

爾うして此危險を避けるために余と雖も勿論完全なる小作條令の必要を感ずる者である、然しながら法律のみを以て地主と小作人との間の關係を圓滑に纏めんとするは望むべからざることである、地主たる者は全體小作人を何う思ふ乎、小作人は鋤や鎌の如き器具ではない、亦牛や馬の如き動力ではない、小作人は人である、同胞である、多くの意味に於て尊敬すべき者である、地主に此事が充分に判るまでは如何に完全なる小作條令が發布されても小作問題は解決されない、亦小作人に於ても同じ事である、地主を見ることたゞ小作米の强求者と

のみ思ひ、天と地と人とに對する己れの義務を悟らず、たゞ不平を唱へて可成丈け地主の權利を縮め呉れんとのみ思ふやうでは、地主より如何に寛大なる待遇を受けても少しも之を有難いとは思はない、慈悲と公平とは地主に於てのみ必要ではない、亦小作人に於ても大に必要である、地主をして小作人を慈はしめ、小作人をして地主の心を推量しむるに至て初めて此最も困難なる小作問題は解決されるのである。

茲に至て傳道なるものゝ農業改良にも非常に必要なることが感ぜられるのである、爾うして吾等傳道師は世の政治家や經濟學者には常に無用物視さるゝに係はらず、或る場合に於ては彼等政治家輩が夢想だもせざる所に於て有力なる農事改良を實行しつゝあるのである、吾等の説教に由りて、一家が全く其面目を革め、小作人は喜び、土地は前時に勝つて大切に取扱はれ、收穫は增し、其恩惠が延ひて彼等が飼育する猫や犬にまで及んだ例は尠くない、吾等は法律の

力を借らず、亦學者の威權を用ひずして、世の腐敗に沈淪める農家の中に希望の光明を送り、彼等に一厘の富を增加へずして、豐穰の秋に遭ひし時のやうな歡喜を彼等に供することが出來る、吾等は斯く云ひて何にも吾等の理想を語りつゝあるのではない、吾等は吾等の實驗を語りつゝあるのである、吾等は實際に天より降る慰藉を以て我國の農民を救ひつゝある、前にも言ふた通り、吾等には金もなければ銀もない、然し吾等の有つ或物を以て吾等は大政府の威力を以てしても到底爲すことの出來ない或事を我が農民の中になしつゝあると思ふ。

（明治三十六年十月）

饑饉の福音

是は私が先輩本多庸一君に強ひられて明治三十六年五月十一日東京神田青年會に於て開かれたる東北地方凶歉救濟演説會の高壇に於て述べし主旨を敷衍したものであります。

饑饉は或る意味から云へば神の下し給ふ刑罰であります、之れは民の懶惰を懲らさんが爲めか、又は爲政家の怠慢を責めんが爲めに、神が人に加へ給ふ鞭であります、夫れ故に饑饉其物は決して喜ぶべき幸福なる事ではありません、

エホバ斯く曰ふ、此預言者等（僞りの預言者なり、平和なき時に平和、平和と呼んで、民を欺く者なり）は劍と饑饉に滅さるべし、また彼等の預言を受けし民は饑饉と劍によりてエルサレムの街に擲棄られん（耶利米亞書十四章十五、十六節）、

主エホバ斯く言ひ給ふ、嗚呼凡てイスラエルの家の惡しき憎むべき者は禍なるかな、皆な刀と饑饉と疫病に仆るべし（以西結書六章十一節）、

我々基督信者の信ずる所に由りますれば宇宙の根柢は神の意志でありまして、宇宙の現象は一つとして神の命に依らずして起るものではありません、故に我々は饑饉の災害に遭遇して單に之を天然自然の現象としてのみ解することなく、其中に含まるゝ深き道德上の意味を解釋し、神の聲に聽き其正當の懲罰を受け、以て我々の愆の赦されんことを祈るべきであります。

然しながら凡の災害を其正當の意味に於て解釋しますれば災害は却て我々に多くの福音を傳ふるものであります、素々神の意志より出たる災害でありますから其苦き杯の中に甘き訓誡が有るべき筈であります、饑饉を單の災害として受くべき乎、或は之を變じて幸福の泉となすべきかは單へに我々の之に加ふる註解如何に由ります。

一、饑饉に依て我等は我等の平常の用意の足らない事を覺るのであります、

惰者よ蟻に行き其爲す所を觀て智慧を得よ、蟻は首領なく有司なく君王なけれども夏の間に食を備へ收穫の時に糧を歛む（箴言六章六、七、八節）

爾うして我等が糧を貯ふべきは冬のために許りではありません、饑饉は大抵は年を限つて來るものでありますから、我等は又其ための準備をもなして置くべきであります、さうして又慈惠深き神は決して瀕々饑饉を降し給ひません、彼は僅かに三十年に一度か、四十年に一度之を降し給ふのであります、爾うして其間に神は幾度か豐年を降し給ひます、幾度か有り餘る程の食物を我等に賜ひます、然るに我等は今日の事にのみ氣を奪はれて明日の事を思はず、神の恩賜の糧を浪費し、或は酒を造つて之を飲み、暴飲し暴食し、以て幾度か此身を害ひました、此世に在て最も貧しき人と雖も其一生の收得を平均致しますれば一生一度や二度の饑饉で決して餓死すべき筈の者ではありません、懶惰の罪であります、浪費の罪であります、後を慮らない罪であります、神の恩惠を無視する

罪であります、是れがために饑饉に遭遇して我等は周章狼狽くのであります、其罰として我等は餓死の危險に陷るのであります、若し我等の爲すべきことを爲しましたならば、我等は饑饉に對して曰ふべきであります、「饑饉よ、汝の刺は安くに在る乎」と。

二、饑饉に由て我等は政治家の無能怠慢と社會組織の不完全を覺るのであります。

縱し個人として食物の不足を告ぐることありとするも、國家として饑饉に迫るの理由は決して無い筈であります、若し政治家が政治家であり、社會が社會でありますれば饑饉が萬一全國に三年續くとしても一人の餓死する者を出さずして濟む筈であります、日本國の米の產出高は一ヶ年に四千萬石であります、其外に雜穀が二千萬石程上ります、其外我國の輸出物に對して輸入する食料品を合しますれば、日本國民の食物は優に有餘る筈であります、爾うして時には豐

年相續き、夫れがため米穀國内に溢れて七八百萬石の輸出をなした歳もありました、然るに日本國民は斯かる過分の食糧を何う使用して居ますか、彼等は此貴重なる米穀を潰して毎年何百萬石と云ふ害有て益なき酒を造つて居るではありません乎、又之を給して何の善事をも國家に貢獻しない數萬の懶惰貴族を養つて居るではありませんか、又重き税を此民に課して何の判然したる目的なきに用もなき益もなき大いなる軍艦を幾艘も造つたではありません乎、若し全國民が禁酒を決行するとすれば、それがために毎年何百萬人と云ふ窮民を優に養つて行くことが出來るではありません乎、貴族の一家を支ゆるためには數千の農夫は汗を滴して年中働らいて居らなければなりません、一人の兵卒を養ふためには六人の壯丁が地を耕さなければならないとの事であります、斯かる不公平極まる政治が行はれて居て國に餓死する者の出づるのは決して怪むに足らないではありません乎。

汝等は災禍の日を尚ほ遠しと爲し、自ら象牙の牀に臥し寢臺の上に身を伸し、群の中より羔羊を取り、圈の中より犢牛を取て食ひ、琴の音に合せて唄ひ噪ぎ、大杯をもて酒を飲み、最も貴き膏を身に抹り、ヨセフ（國民）の艱難を憂へざるなり（亞麽士書六章三―六節）、

斯かる政治家が國を治め斯かる社會が成立つて居る間は饑饉は國民の上に臨むべき神よりの適當の刑罰であります、舊い支那の教誡に循ひましても國に三年の貯蓄なき時は其國危しとのことであります、然るに文明の今日此日本國に三年の貯蓄がないどころではありません、一年半年の貯蓄がありません、東北一部の地方が凶歉に罹りたればとて之を救ふことの出來ない狀態であります、斯かる國家は累卵の危きに居ると云つても決して過言ではありません。

三、饑饉は人に取つては災害でありますが、土地に取つては幸福であります。利慾に耽ける民は土地より得られる丈けを得んと欲して之に少しも休養を與へ

ません、彼等は毎年之を使用して止まざるのみならず、若し氣候の許すあれば一年に或は二回或は三回の收穫を爲さんと致しまする、爾うして彼等は斯くも土地を責め付けるにも關はらず之れに肥料を施すこと至て僅少で、夫れが爲めに土地は年々と痩せ衰へて行きます、土地とは決して永久無盡の生産力を具備ふるものではありません、之れは或る意味から云へば生物のやうなものでありまして、若し之を殺さんと欲すれば殺すことの出來るものであります、故に賢い農夫は能く其土地を庇護ひ、決して之を强迫致しません、即ち土地の生産力以上の收穫を之より得んとは致しません、然るに暴慾の民は其土地を省みず、只之より多く取らんことをのみ計つて之を肥さんことを計りません、茲に於てか土地の安息の必要が生じて來るのであります。

エホバ、シナイ山にてモーセに告げて言ひ給はく、イスラエルの子孫に告げて之に言ふべし、我が汝等に與ふる地に汝等至らん時はその地にもエホバにむ

かひて安息を守らしむべし、六年の間汝その田野に種播き、また六年の間汝その菓園の物を剪伐てその果を歛むべし、然れど第七年には地に安息をなさしむべし、是れエホバに向ひてする安息なり、汝その田野に種播くべからず、また其菓園の物を剪伐むべからず 汝の穀物の自然生えたる者は穫るべからず、また汝の葡萄樹の修理なしに結べる葡萄は歛むべからず、是れ地の安息の年なればなり（利未記二十五章一―五節）、

是れは實に賢い法律でありまして、此點に於ては四千年前のモーセの法律は今日の開明國の法律に遙かに優つて居りました。

神は其造り給ふた土地を愛し給ひます、爾うして其永久に人類に濫用さるゝを許し給ひません、爾うして若し人が進んで神の命を奉じて土地に安息を與へませんければ神は自ら之に安息を與へ給ひます、爾うして饑饉年は土地の安息の年であります、是は神が其造り給ひし土地の爲に强制的に施行し給ふ安息の年

であります、此年には人は泣きまするが土地は喜びます、土地は三四十年のあひだ間斷なしに其職責を盡しましたから此年に限り久振りにて休息致します、爾うして若し人が神に對して從順であり、土地に對して忠實でありましたならば此年と雖も彼は決して泣くの必要はないのであります、若し彼が七年目には一度づゝ必ず任意的に土地を休ませる途を立てゝ置きまするならば、彼は饑饉に遭ふても少しも狼狽へません、人は七年に一度づゝ任意的に饑饉の稽古を爲して居りますから、時偶天然の饑饉に際會致しましても能く之に堪ゆるの途を知つて居ます。

四、言ふ迄もなく凡ての災害は冷却せし人の同情推察の情を起すものでありまず、爾うして茲に特に注意すべきことは災害なるものは多くは惡人其者の上に直に來らずして、眞個の惡人以外の者の上に來ることであります、今年の我邦の饑饉の如き若し其民の罪惡の度合から申しましたならば、之は西南の薩摩か長州

に來るべき筈の者であります、日本人を今日の僞善と墮落に導いた者は主に薩州人と長州人とであります、又彼等の罪惡を助けた者は肥後の敎育家と文人とであります、故に若し罪惡應報が饑饉の目的でありますならば之は主に西南地方を襲ふべき筈のものであります、然るに實際は全く之に反して比較的に罪少き東北人の上に臨み來つたのは如何にも慘酷であるやうに見えます、然しながら此慘酷無慈悲の中に深い意味が籠つて居ることが分ります、何にも惟り饑饉に限りません、災害は凡て斯くあるものであります。

イエス答へて彼等に曰けるは……シロアムの塔仆れて壓殺されし者十八人はエルサレムに住める凡ての人々よりも勝りて罪ある者と意ふや、我爾曹に告げん、然らず、爾曹悔改めずば皆な同じく亡さるべし(路加傳十三章四、五節)、放蕩の結果黴毒に罹る者がありますれば其結果を最も甚しく受くる者は放蕩者彼自身ではなくして彼の生みし子供であります、若し敎育界に大腐敗が來り

ますれば縲紲の耻辱を受くる者は比較的に罪の輕き者であつて、實際の大罪人は無事平穩であるとのことであります、最も罪の少い者が最も罪の多い者の罰を擔ふて苦しむとは甚だ不公平のやうには見えまするが、然し是れが斯世の元則と稱しても可いものであります、爾うして私の信じまするに斯くして始めて罪の罪たることが判るのであります、頑是なき小兒が放蕩無賴の父の罪を負ふのを見て姪縱の罪惡の如何に恐るべきかゝ分かり、それと同時に之を避くるの心が之を目擊する人の心に起るのであります、それと同じやうに明治政府の犯した罪惡に最も關係の少ない東北の民が或は海嘯に罹り、或は饑饉に苦んで此政府の如何に思慮なき、如何に無慈悲なる、如何に不公平なる、如何に頼むに足らざる政府である事が能く判るのであります、爾うして斯く觀じ來つて我々は一層明白に此等罹災民に對する我々の責任が分かるのであります、即ち彼等は主に彼等の罪のためではなくして日本全國民、特に薩長の僞善政治家のために

苦みつゝあるのであるのを見まして、我等は殊更に深い同情を是等の窮民に向つて表さなければならないことが判ります。

以上が苦しい饑饉の經驗が我等に傳へんとする福音の三つ四つであります、爾うして我等が其教訓を學び盡した時に饑饉は我等の中を逝るのであります、

我が忿恚溢れて暫らく我が面を汝に隱したれど永遠の恩惠を以て汝を憐まん

と、こは汝を贖ひ給ふエホバの聖言なり（以賽亞書五十四章八節）、

國民が勤儉貯蓄の美風を養ひ、飲酒放縱の愚と罪とを覺り、政府が外に對つて虛勢を張るも、內を養ふの途に出ずば是れ國家を內より破壞するの手段なるを覺り、貴族は其懶惰と無能と無智無學とに耻ぢ、土地は國民の愛護する所となりて之に安息を給するの途を講ずるに至り、殊に今日の如き同胞相離反し、人は其隣人を掠めるを以て大なる手柄と信ずる時に方て、相憐推察の神聖なる情を回復するに至りますれば、其時は饑饉が其訓誡の功を奏した時でありまして、

其後に來るべき者は災害にあらずして幸福であります、饑饉にあらずして豐年であります、其時には神は我等に對ひて言ひ給ひます、

我を試みよ、我が天の窓を開らきて容るべき所なきまでに恩澤を汝等に注ぐや否やを（馬拉基書三章十節）、

然しながら今年の饑饉が更らに其訓誡の功を奏せず、軍備は更らに擴張せられ、國債は更らに增加せられ、政治家は其愚と迷とを去らず、貴族は其空しき榮華を繼け、國民擧つて其僞善に甘んじ、飲酒と賭博と詐欺の生涯を續けまするならば私は信じて疑ひません、此次ぎに來りまするものは更らに大なる饑饉、之に加へて大なる劍、或は火、或は水、國家を其土臺より覆へす者であります、

今日若し其聲を聽かば爾曹心を剛愎にする勿れ（希伯來書四章七節）、今年の此小饑饉を以て國民の目を醒ますことが出來ますれば是れ全國民に取て大幸福であります。

自由傳道と自由政治

是れは自由投票同志會發起の演說會に於て述んとて用意した者でありまして、其一部は去る二月七日の夜東京下谷山下町雁鍋に於て開かれし同會の演說會に於て述べた者であります。

私は今日の演說會に出席すべからざる三つの理由を有つ者であります、其第一は私は咽喉病を病む者でありまして、醫師に冬の中は演說を禁ぜられて居りまする故に既に其事を新聞紙上に廣告し、今日まで幾回か演說の依賴を謝絕しました、故に今日此演壇に上りまするのは私に取ては一には醫師の言に反き、二には公衆を欺くことであります。第二に私は耶蘇敎の傳道師でありまして、政治には一切關係しない者であります。第三に私は衆議院議員の選擧權を有たない者臨んではならない者であります。

でありまして、政治的には一人前の人間として認められない者であります、故

に投票が自由であらうが不自由であらうが私は其事に就ては少しも痛痒を感じない者であります、斯かる私が斯かる會合に出席すべき者でないのは勿論であります。

斯くも重大なる理由を有つのに何故に今日此壇に現はれたとの詰問に對して、私の答へまする所は、第一に私の關係して居る理想團の發起に係る此演說會が辨士の缺乏を感ずると聞いては私は沈默を守るに忍びません。第二に耶蘇教の傳道師も人間である以上は少しは政治の事を辨へて居らねばなりませんから、彼も時に或は政治に就て論辯しても可いと思ひます。第三に縱し投票權は有たないと致しましても—私は投票權を有たない事を少しも苦に致しません、又耻とも思ひません、今日のやうな時に方ては投票權を有たないことは多くの點に於て幸福の事であります、私は生涯其煩累より免がれたく欲ふ者であります—私も日本人の一人である以上は投票の正、不正等に就ては喙を容るゝの權

を有つて居ると思ひます。是等の三つの抗辯的理由がありまする故に—少し牽強附會のやうには聞へまするが—私は今日強ひて此所に出席致しました。

然し耶蘇坊主の私の事でありますから題も自づから坊主臭くあります、亦言ふ所も坊主臭くあらうと思ひます、然し是は仕方がありません、坊主が坊主臭くなければ眞個の坊主ではありません、世には坊主臭くない坊主があります、彼は即ち俗僧であります、私は不肖なる者ではありまするが自ら坊主を以て任ずる以上は坊主の本性を失はない積りであります。

「傳道と政治」、傳道は宗教の事であるから神聖である、然し政治は俗界の事であるから不潔であると言ふのが今日此國の常であります、成程我國今日の政治界を見まするならば人が爾う思ふのも決して無理ではありません、今や政治は眞面目なる人の入る所ではありません、山師や、虛言家や、怠惰者が爭て入らうとする我國今日の政治界なる者が君子の入るべからざる所と見做さるゝのは

當然の事であります。

然し政治とは元々斯くあるべき者でないのは私が言ふまでもありません、政治が最も純正なる時は宗教と同じやうに神聖なる者であります、西洋に於ては佛國のルイ第十一世の政治、伊太利フローレンスのサボナローラの政治、英國のコロンウエルの政治等は神聖なる政治の實例であります、我國に於ても最も善き政治は皆敬神的の政治でありまして、是も亦た神聖で宗教的でありました、政治と宗教とを一つに爲すのは害多くして私の賛成する所ではありませんが、然し政治を全く宗教より離して、政治家たる者は俗才さへ有れば泥棒でも詐欺師でも醉漢でも放蕩兒でも誰れでも成れる者であると思ふに至りましたのは、是れ政治のために最も慨歎すべきことであります。

傳道も眞面目なる業であれば政治も眞面目なる業であります—眞面目なる業であるべき筈であります—夫れ故に傳道も政治も其活動の區域こそ異なれ、其方

法精神に至ては同一であると思ひます、凡て眞面目なる事業は同一の精神より出づる者でありまして、其素質に於ては少しも違ひません、美術でも、文學でも、工業でも、商業でも、眞面目なる事業は少しも異りません、眞面目なる大工は眞面目なる畫家の心を知ります、眞面目なる商人は眞面目なる軍人の術を知ります、人は其の誠實に達すれば皆同一家の兄弟姉妹であります、宗教は神聖で政治は山師泥棒の從事すべき商賣であると思ふ我國今日の政治家輩は、自身未だ誠實の何たる乎を知らない者であります。

然らば如何なる點に於て政治は傳道に似て居ります乎。

第一、傳道も政治も信仰の事業であります、信仰とは勿論必しも神や佛を信ずる事許りではありません、是れも確かに信仰でありまするが、然し信仰とはFaith—又は Belief 即ち確信の意でありまして、其根本的確信とも稱すべき者は即ち正義に關する信仰であります、即ち正義の神聖と勢力と必勝とを信ずる

ことであります、信仰は懐疑の正反對であります、正義に味方する者は少數であつて、不義に味方する者は多數であるから、夫れ故に正義は或は負ける乎も知れぬなどゝ言ひて懼れ戰慄く者は是れ正義に就て疑惑を懷く者でありまして、之を信仰する者ではありません、正義を信仰する者とは正義其物を信仰する者でありまして、世人の正義に關する輿論に動かされて、其信仰を動かす者ではありません、私が傳道に從事致しますのも及ばずながら此信仰を有つて居るからであります、日本の如き國に於て基督教の傳道に從事することでありますれば、是れに社會の贊成のないのは勿論の事でありまして、若し目前の趨勢より打算すれば私の負けるのは知れ切つて居ります、然し私は信じて疑ひません、現今の私の逆境は私の取る主義の誤謬である證據にはなりません、若し私が正義に據りますれば一人の私は四千五百萬の國民より强い者であります、私に大博士の駁擊があらうが、全國民の反對があらうが、其事には私は少

しも意を留めません、正義が正義である以上は其上に立つ私は金城鐵壁よりも堅い者であります、此信仰がなくして傳道は決して出來ません、基督も保羅も釋迦も日蓮も傳道師といふ傳道師は皆な此確信の上に立つた者であります。政治家も同じであります、政治とは政畧を施すことではありません、正義を行ふことであります、爾うして正義は宇宙の正義でありますから、之に反抗する者は終には滅亡すべき者でありますから、我等は之を齒牙にだに懸くるに及びません、正義はキット行はれます、縱令全國民が反對するとも行はれます、縱令全世界が反對するとも行はれます、私は人を信じません、正義を信じます、故に正義が幾度敗北するとも少しも失望致しません、私の最も心配すべき事は私に贊成者が多いか、尠いかではありません、私が正義に據るか據らない乎であります、爾うして一旦釋然として我は正義の上に立つと確信する以上は其後は何が來やうが少しも懼るゝに足りません。

私の知る所に依りますれば偉大なる政治は皆な此信仰の政治でありました、リンコルンの政治、マッヂニの政治、グラッドストーンの政治は皆な此信仰の政治でありました、世に彼等を動かすに足る勢力はありません、彼等は盤石よりも堅い者であります、彼等は彼等の失敗の故を以て少しも歎きません、グラッドストーンの如き、彼の末路は政治的には至て憐れなる者でありましたが、然し彼は滿々たる希望を抱いて死に就きました、彼は彼の意見の何時か實行せらるるに至るを信じました、之を信じ之に則て彼の政見を立て、之を實行せんと努めました、故に彼の政治はルーテルの宗教に等しき者でありました、其勇猛なること、其堅固なることに於ては兩人共相互に能く似て居りました。

第二、政治は傳道と同じく信仰の事業でありますから、それと同時に亦た公平の事業であります、正義を行はんと欲する政治家に地方的觀念とか階級的偏頗心とか云ふやうなものゝ有りやう筈はありません、一視同仁は天の心でありま

す、爾うして天の心は正義であります、爾うして傳道は天の心を傳ふる事業でありまして、政治は國家の上に之を行ふ事業であります、傳道と政治とは其事業の目的に於て全然相一致して居ります。

眞理を目的と爲ない宗教に宗派なる者があります、正義を目的と爲ない政治に政黨なる者があります、此世に於て寺を建てんとする者、教會を作らんとする宗教家は宗派に賴ります、何か正義以外に勢力を求めて、之に依て事を爲さんとする政治家は必ず政黨に入ります、宗派に屬する宗教家は恒に意志の弱い、確信の無い宗教家であります、政黨に入て世に所謂大頭なる者の勢力を藉りて己れの勢力を張らうとする政治家は恒に經綸も政見も有たない政治家であります、眞理は人類全體を包む者でありますから之れは宗派とか學閥とか稱ふるものゝ中に押籠める事の出來る者ではありません、其やうに正義は餘りに嚴格にして餘りに公平なる者でありますから、之を一黨内に在つて維持することは

出來ません、世に謂ふ愛黨の精神なるものは偏頗固陋の精神でありまして、斯かる精神に驅られて國家の大事を調理することの出來ないのは分かり切つたることであります。

第三に、傳道と政治とは素々自由なる者であります、夫れは何故であるかと云ふに眞理も正義も素々自由であるからであります、自由とは意志の自由選擇の外何者にも訴へない者であります、眞理は人に向て「我を受納れよ、然らざれば我れ汝を殺さん」とは申しません、又「我を信せよ、然らば我れ汝の欲するものを與へん」とも申しません、眞理は唯申します、「我を我れ自身の爲に信せよ、利害得失の念より全く離れて信せよ、汝、我を信ずればとて我は必しも汝の欲する世の善き物を以て汝に約束せず、否な、我を信ずるに依て汝は多くの艱難を受けん、然れども之に關はらず我を信せよ、其は我を信ずるは人類たる汝の義務なればなり」と、是れ丈けであります、夫れ故に忠實に眞理を傳ふる

其傳道師は眞理以外の勢力には何にも頼りません、彼が威力、權力、暴力、金力を用ゐないのは勿論であります、彼は文の秀たるを以て、或は辭の婉しきを以て殊更に之を飾らんとも致しません、眞理には眞理其物の美があります、眞理其物の牽引力があります、何にも殊更に私共の美文や能辯術を以て之を飾るの必要はありません、單純、無垢の眞理、眞理有の儘、是れが最も美しい慕はしい者であります、金を鍍金する者は馬鹿者であります、眞理を飾らんとする者は是れよりも更らに愚かなる者であります、夫れ故に眞理の忠實なる傳道師は唯簡單明白なる眞理を述べん事のみを努めて其他の方法手段は成るべく取らないやうに致します、彼が政府の力に頼らないのは勿論であります、政府が宗教を助けて呉れる程有難迷惑なる事はありません、博士の威力を藉らないのは勿論であります、博士なんどは―殊に日本今日の博士なんどは眞理には―殊に私の信ずる基督教の眞理には、―何の用も價値もない者であります、眞理の

傳播には金も至て不用であります、眞理に金錢の價値の附く時は其直ちに腐る時であります、學問其物でさへも眞理の傳播には時には邪魔物であります、威なく、學なく、金なく、辯なくして、獨り保ち、獨り擴がり、獨り人を惹き附くる者が眞正の眞理であります、故に傳道師たることは容易の事ではありません、彼は其の主人たる眞理を非常に大切に取扱はなければなりません、彼は其れをして獨り輝かしめ、獨り人を感化せしめなければなりません。

正義と其實行者たる政治家も同じ者であると思ひます、正義其物が最大の勢力であります、正義其物に絶大の利益が附着して居ります、正義は弱い者であるから我等は別に勢力を作つて之を維持しなければならないなどゝ言ふて、老婆が赤子を扱ふやうに正義を扱ふ者は正義に對して最も不忠實なる者であります、正義は幼主ではありません、彼はジャイヤント(巨人)であります、宇宙の勢力を握る者であります、之をさへ說き、之をさへ叫べば終に黃金國は來るので

あります、然るに此事を知らないで、正義を强うると稱して威力を以て人を脅かし、或は金力を以て人を誘はんとするのは正義に對して不忠極まる所業であります、斯かる人が正義を行ふとの出來ないのは何よりも明かであります。

正義を赤子扱ひにするのはまだしもであります、之を利用するに至ては褻瀆の罪、到底赦すことは出來ません、正義を利益の下に置いて、正義を以て利慾の奴僕となし、其名を聞いては心の中に嘲弄し、政治とは利を己に收むる機關であるものゝやうに思ふ者に至ては、是れ國賊の長、逆臣の首、政治界は勿論のこと、人間社會よりも全然排斥すべき者であります。

斯う云ふと或人は申します、我國今日の多數の人は申します、夫れは理想ではあるけれども到底行はれる事ではない、世人の多數は愚人であるから是れに純正の眞理や正義を說いた所が到底受納れられる者ではない、此世に於て事を爲さんとするには其れ相應の手段がある、眞理とか正義とかいふて、名のみで實のな

い者を唱へた所が何の効能もないのは能く分つて居る、そんな詰らない理窟を唱へて居る間には國は終には亡びて了ふから、今の中に適當の方法を講じて、社會をして我が意見を採用せしめて、此國の安全を計らなければならないと。一應尤の說のやうに聞へます、然し斯かる人は信仰の人、主義の人、眞理と正義とに忠實なる人ではありません、而已ならず、彼等は智畧のある人のやうに見えて、實は至て淺慮の人であります、私は私の傳道的生涯に於て斯かる老婆心を懷ける多くの傳道師を見ました、彼等は信徒の信仰を固うするとか稱へまして、望みもしない洗禮を彼等に授け、彼等を敎會內に引き入れてそれで安心であると思ひました、其人は私に申しました、「君の爲すやうでは傳道に少しも締がない、且つ人は弱い者であるから彼等に適當の保護を與へなければ到底其信仰を維持することは出來ない」と、斯う申しまして彼等は敎會を作り敎勢を張り、一時は眞理の爲に非常の効を奏したやうに見えました、然し蛭の子は

何處までも蛭であります、縱令神聖なる敎會內に收容せられても、眞性の惡魔は天使とは化しません、自由意志に訴へないで、外部の壓迫や、誘惑で作り上げ、其上規則で縛り上げて信者と成した者は終には其本性を顯はしまして、不信者どころではない、世の俗人に更に黑塗りしたやうな人物となりました。權力や金力や其他の總ての方法を以て傳へた眞理は何の用にも立ちません、それで眞理が傳はつたと思ふのは、爾う思はれるのみでありまして、事實決して傳はつたのではありません、眞理を傳ふるに最も善き方法、最も早き方法は、眞理其物を自由選擇に任かして、我々人間は之に何の干涉をも試みない事であります。

是れは私の傳道上の實驗であります、夫れ故に私は今は努めて自身を無勢力の地位に置きまして、眞理をして其物自身で擴張せしめんと努めて居ります、私に信徒を收容するための敎會なる者はありません、私に金錢を寄附して呉れる

傳道會社はありません、私は官邊に何の緣故をも持ちません、私は何人にも馬鹿にされます、然し斯かる無力なる私は眞理の傳播に就ては多くの便利を持つ者であります、私如き者に依て傳へられたる眞理は、其物自身に於て効力を持つ外に、何の効力をも有ちません、私は人を感化し、社會を救ふの力を持ちません、然し私の說く單純なる眞理、是れは世界を動かすに足る勢力であります、何の策畧をも用ゐずして眞理を傳播する者が眞理に最も忠實なる傳道師であります。

政治家も同じ事であります、正義は我に在る故に我は如何なる手段を取ても之を行ひ見んなど云ふ人は未だ正義の何たるかを知らない者であります、正義とは政治家の世話にならなければ何も爲すことの出來ないやうなそんな意氣地無ではありません、正義が自由に人の心に入り、人が自由に正義を迎へし時には非常の大事を爲す者であります、正義に依らずして、勸誘とか運動とか云ふも

のに依て成つた代議士とか政黨とか云ふ者を御覽なさい、其の無力なること實に言語に斷へた者であります、彼等は實際何事をも爲し得ません、自由に選まれない代議士は自身自由を有たない者でありますから自由に其身を措置することが出來ません、其結果正義と見ても正義に贊成することが出來ず、不義と見ても之に反對することは出來ません、人の自由を買て政治家と成りし者程無能力なる者はありません、斯くても自己の經綸を施さんとすなど言ふのは實に抱腹絕倒であります。

私は私の傳道事業に就いて一つ誇ることがあります、私は未だ一回も私の友人を私の宗敎に引入れんとして勸誘を試みたことはない積りであります、其實例として私の家に一人の書生が居ります、彼は私の家に十四年間出入りをして居ります、彼は私の最も信任する者であります、然し私は誓て申します、私は此の永の十四年間未だ一回も彼に向て私の宗敎を說き勸めた事はありません、

私は彼に聖書を買つて與へた事はありません、私は彼が私に倣ふて私の宗教を信じないとて彼に向て未だ一度も不信任の態度を示した事は無いと思ひます、斯くして彼と私とは十四年間睦ましく暮らして來ました、爾うして漸く此頃彼は稍や少しく私の宗教を信ずるやうに成つたやうであります、然し彼は今でも私の顏の前では態と不信者を氣取つて居ります、然し私は彼が密かに信仰心を起したのを密かに喜んで居ます。

私は政治に於ても同じ態度を取る者であります、私は政治を嘗りました、然し私とても人間でありまして人間は希臘の哲學者アリストートルの說に從ひますれば政治的動物であります、政治に對しては慾も熱心も希望も何にも持たない私でも政治には如何なる場合に於ても決して顏を出さない乎と言ふに爾うは言へません、然らば如何なる場合に於て私は政治に顏を出すかといふに、それは次の如き場合であります。

私は當選とか議員の座席とか云ふ事に何の考へも有たない時に私の發表した事のある政見に依て、私の國人が私が賴みもせず、候補者にも立たず、私はたゞ通常の通り私の本職なる基督敎の傳道に從事して居りまする時に、私には何んの交渉もなしに私を選んで衆議院の議員となしたとの通知を受けました時には、其時には止むを得ません、私は迷惑千萬ではありますが、然し是れ天の命、國の命でありまするから、止むを得ず私の所望を總て排斥して、人類と國家に對する義務としてイヤ〳〵ながらも政治界に入ります、然しながら其時の來るまでは縱令千年立たうが萬年立たうが、私は決して政治などへ此身を投じません、自由は私の主義であり、精神であり、手段でありますから、自由に依らずしては私は何事も爲さない積りであります、爾うして最も幸ひなる事には斯かる主義を採る間は私は當分の間日本の政治界に引出さるゝ心配はないと、其事のみ日々心の中に感謝して居ります。

（明治三十六年二月）

東北傳道

近刊牛谷清壽翁著『東北の將來』へ寄贈せんとて稿せる一編

人は肉と靈とである、肉ばかりではない、亦靈ばかりではない、亦肉である、故に彼を完全に救はんと欲せば彼の靈肉兩つながらを救はなければならない。

肉は外であつて、靈は內である、肉は慾と情との存する所であつて、靈は意と神との存する所である、肉若し衣服ならば靈は身體である、肉若し宮殿ならば靈は神體である、肉は靈のためであつて、靈は肉のためでない、身體は衣よりも優れる如く、靈は肉よりも優さる、肉の靈に必要なるは以て靈を肉の屬と見做す理由となすに足らない。

故に人を救ふの目的は其靈を救ふにある、肉のために肉を救ふのではない、靈

のために肉を救ふのである、我等は何れの救濟事業に從事するに方ても此一事を忘れてはならない。

然れども今の世に謂ゆる救濟事業なるものは殆んど其すべてが肉の救濟である、殖產工業は勿論人に衣食を給することである、政治法律は人權の擁護であつて、人權の擁護とは財產生命（肉體の）の擁護である、敎育は主として人に衣食を獲るの道を敎ふることである、而して宗敎ですら、今は現世に於ける生活の幸福を增すの手段と化した、今の世は一から十まで肉の世である、孝行とは親に衣食を給し肉體的快樂を供することである、忠君とは富國强兵に努め、物質的に國の隆盛を計ることである、今の人は人に靈あることを知ると雖も、靈として人を扱はない、彼等の眼中只肉あるのみである、彼等の思惟の根柢は肉である、彼等は肉を離れて何事をも思惟することは出來ない。

東北の救濟、是れ目下の日本人に取ては最大問題である、然り、最大問題であ

るべきである、東北六縣は其面積に於ては日本の七分の一である、人口に於ては其九分の一である、爾うして此土地此民が頻年海嘯に、不作に、霜害に、無智に無學に苦みつゝあるのである、如何にして此民を救はんか、是れ日本國の最大問題であるべき筈である、然れども奇なることには東北の救濟が最大問題となつて居らない、海外の朝鮮滿洲が最大問題となりつゝある今日、東北の救濟問題は第三第四の地位に置かれつゝある、是れ甚だ奇異なる現象と言はなければならない。

然し東北が一般に疎せらるゝ理由は發見するに難くない、それは東北の生產力が比較的に多くないからである、即ち東北が日本國の物質的强大に貢獻し得る部分が比較的に少いからである、若し阿武隈川の沿岸が利根川のそれのやうに豐富であつたならば、若し陸奥が筑前であり、羽後が肥後か筑後であつたならば、東北問題は言はずして業に已に日本國の最大問題であつたであらう、政治

家も敎育家もすべて眼を東北の富源に注いで、慈善家が起つて特別に東北のために絶叫するの必要は更らにないであらう。

東北の等閑に附せらるゝ理由如斯しであるとすれば、其理由の裏に更らに大なる理由のあることを發見するは決して難くない、其貧困の故を以て東北を輕視んずる者は東北五百萬の民よりも東北四千四百方里の山野に重きを置く者である、民の生產力と購買力とに依て其價値を定むる者である、而して斯かる國民が東北問題を等閑に附し置くは決して怪むに足らない、今日の日本に於て東北問題が最大問題として現はれないのは日本人の不完全なる人生觀に職由すると言はざるを得ない。

東北五百萬の民は貴い民である、米を作り、蠶を養ふからばかり貴いのではない、人として貴いのである、彼等一人に若し其衷にあるすべての能力を開發することが出來るならば阿仁の銅山、伊達の絹にまさるの價値があるのである、

彼等は靈魂を有たる人である、薩州人、肥後人、長州人と同じ價値のある人である、否な、若し彼等の靈性を發育するならば貴顯縉紳も及ばざる人と爲ることの出來る者である、若し日本人全體が人の所有品よりも其靈魂を重んずるならば彼等は決して東北五百萬の民を今日の憐むべき狀態に存しては置かない、彼等は有爲なる賴もしき兄弟姉妹を有ちたるの感を以て彼等を誘掖し、開明と幸福と知識とに彼等を導くに相違ない。

然しながら東北が日本全國に重んぜられないのは日本人全體の科ばかりではない、東北人が自己の價値を知らないにも因る、東北は西南に比して其地位から言ふても、地質から言ふても確かに貧國である、勿論其富源の開發は既に其極度に達したりと云ふことは出來ない、然し如何見ても其比較的に貧國であることは確かである、吾人は勿論今より大に東北の物質的開發に努めなければならない、然しながら東北は決して其米や、麥や、絹や、其他の農產物や製造物を

以て競爭場裡に立て勝を制することは出來ないと思ふ、東北には地より產する物の外に何にか他に產物がなくてはならない、爾うして其產物は決して肉に屬するものではない、今の日本人が聞たら笑ふであらうが、然し余輩の信ずる所に由れば東北の特產物は意志でなければならない、靈魂でなければならない、即ち地より得る所が薄いから天より獲る所が厚くなければならない、爾うして是れ決して空想ではない、世界何れの國に於ても、我が東北地方の如き地位と境遇とに置かれし國に取ては靈を以て肉に勝つより他に勝を制する途はないのである。

試に見よ、北歐芬蘭土の民を、數は三百萬に過ぎない、其土地は多くは極寒の野地である、岩と湖水とは其面積の半分以上を塞ぎ、北寒帶の木材を除いては他に誇るべき物產とてはない、然しながら芬蘭土人は最も圓滿なる發達を以て世界に鳴る民である、敎育の普及、宗敎の純潔を以てしては、五大洲中、多

分此小國民に及ぶ民はあるまい、芬蘭土人は北緯六十度以北に在て、甚だ羨むべき民である、爾うして何が彼等をして此羨むべき狀態に達せしめし乎と尋ぬるに、其説明は至て明白である、彼等は靈を以て肉に勝つたのである、物の缺乏を補ふに靈を以てしたのである、少しく神秘的の言語を以て曰へば彼等は虛空より滋養分を吸收するの秘訣を探り當てたのである。

加奈太が合衆國と併び立つのも其故である、那威瑞典の兩國が賤む可らざる文明國であるのも其故である、アイスランドの如き洋中の磽确瘠薄の孤島ですら之に住するに高尚の民を以てすれば一廉の小文明國を洋面に現出せしむるのである、若し土地を耕し得ずんば民の心を耕すべきである、左すれば土地より生ずる產にまさる產を得て國は榮え民は輝くのである。

國が貧しければ貧しき程、其民の心を耕すの必要が多いのである、人は何人も其靈を磨くの必要があるが、然し貧しき民は富める民よりも其必要が多いので

ある、東北人も九州人も人たるの點に於ては一つである、然しながら靈的に富むの必要に於ては二者決して一つではない、九州人や中國人には肉的に榮ゆる途が多く備へられてある、彼等は君子ならざるも聖徒ならざるも其存在を維持するに難くない、然しながら東北人に至ては靈に富むは存在上の必要である、彼等は靈に於て擴張するにあらざれば肉に於ても消滅せざるを得ざる地位に立つ者である。

茲に於てか東北の救濟策として宗教傳道の必要が一層切に感ぜられるのである、余輩は東北の運命は其採用すべき宗教如何に由て定まるとまで斷言するを憚らない、東北は眞理の淨土となるにあらざれば關西並に西南地方と對立することは出來ない、若し薩州の產は眞軍人であり、長州の產は其政治家であり、畿內の產は其美人であり、江州の產は其商人であるとすれば、東北の產は其正直なる、高潔なる、神の人であるべきである、若し東北の山野が其預言者を以

て日本の天下を制することが出來ないならば、東北は實に永久西南人の奴隷として存せざるを得ない。

爾うして余輩の今日までの實驗に照して見て東北に對する余輩の此希望は全く據る所なき希望でないことが判かる、東北人は頑にして愚である、余輩は東北人を愛するが故に斯く公言して憚らない、彼等は然しながら正直である、彼等が人に欺かれ易いのは彼等が眞理を受け易い徵候である、東北の人は容易に眞理を受けない、然しながら一度び之を受くれば頑固に之を維持する、東北に愚物は多い、然しながら九州や中國に於けるが如く疑物は多くない、東北の原野の畿内中國のそれに較べて粗にして大なるが如く其民の心も闊くして質素である、東北は日本のギレアデである、テシビ人エリヤを產すべき地である、彼等に蝗蟲と野蜜を食ふ蠻風はある乎も知れない、然しながらそれと同時に人を憚からずして愚(世の稱する)を押通すの勇氣がある、東北に靈魂開發の希望の存

するのは是れがためである。

愚なる東北人は容易に新しき眞理を受けない、爾うして彼等は亦何人にも甚だ欺かれ易くある、彼等は自己の敵と味方とを見分くるの明に乏しい、彼等は屢々敵を味方として歡迎し、味方を敵として排斥する、故に東北人を感化するに多くの忍耐力を要する、東北を化するは其磽地を耕すが如くに困難である、果實は容易に之を收むることが出來ない、然しながら一度收めし果實は容易に其味を失はない、其關山產の林檎の如き、其花卷產の百合根の如き、余輩は咀嚼で益々其味の芳ばしきを知るのである。

故に余輩は傳道地として東北に多大の希望を繫ぐのである、西南人に賤められ、中國人に愚弄せらるゝ東北人は蓋し「神の智者」として立つであらう、是れ蓋し聖書に謂ゆる「工匠の棄たる石は家の隅の首石となれり」との言に應ひてゞあらう(馬太傳二十一章四十二節)、爾うして東北人が神の聖徒として立つ其時、

岩手山の麓は薔薇の如くに咲き、六甲山の巓は膏を滴らすに至るのであらう。
それ故に余輩は家に在て東北の山野を默想する時に常に聖詩人の言を想出すのである、

涙と共に播く者は歡喜と共に穫とらん、
其人は種を携さへ涙を流して出往きしかど、
禾束を携へ喜びて歸り來らん。（詩篇第百二十六篇五、六節）

（明治三十九年七月）

余の好む人物

附、友誼の神聖

余は基督信者として總ての人を愛すべきではあるが、然し余にも好きな人と嫌ひな人がある、嫌ひな人とて勿論余の敵ではない、余は嫌ひな人ほど、其人に對して余の爲すべきの義務を盡さなければならない、然ればとて余はすべての人を同樣に好むことは出來ない、是れは余の天性の然らしむる所であつて止むを得ざる次第である、甘まい物の好きな人もあれば辛らい物を好きな人もある、人の嗜好は道德を以て縛ることの出來るものではない。

余の好む人物は第一に常識の人である、常識とは勿論世才の謂ひではない、世才の人は余は大嫌ひである、常識の人とは原因結果の理を能く辨へた人である、天然普通の理に從て行動する者である、余は奇跡を信ずるが、然し理由のない

奇跡は之を信じない積りである、余は度々世論に反對するが、然し余一人の判斷を以ては之に反對しない積りである、余が世論に反對する時には余は余の知る世界の知識を以て反對する、余は自身は此世が在て以來の最初の智者であるとは信じない、余の有つ少許の知識は是れ余が古人より受けし者に僅かばかりの自身の發見を加へたものであつて、決して余一人の懷く知識ではない、爾うして常識は知識界に於ける余の適當の地位を敎へる、余は或ることを知る、然し總てのことを知らない、故に余の行動の方針を定むる時には余は余の知る世界最大の智者の指導を仰がなければならない、是を爲すのが常識であると思ふ、爾うして之を爲さない人は常識を缺く人であつて余の好む人ではない。

余は第二に快活の人を好む、陰鬱の人は余は大嫌ひである、余は心の奥底まで透徹て見ゆるやうな人を好む、山中の湖水の如く透明にして深き人を好む、余は己を蔽ひ隱さんとする人を好まない、余は天眞有の儘の人を好む、余は隱す

に物なく、亦、之を隱さんと欲するも隱す能はざる人を好む、余は己を他人の前に吐露して恥ぢることなき人を好む、余は己れ獨り高きに止まり、他人を眼下に見下す人を好まない、亦己の周圍に高き城壁を構へて、己の內部を人に窺はしめざらんと努むる人を好まない、余の理想は淸空である、水晶である、山間の溪流である、若し淸水に魚棲まずとならば棲まずとも宜しい、余は余の心の水を濁してまでも、鮗、鰌の類を迎へんとは爲ない、泥水を愛する者は泥水に到るべきである、余は余の心の中に淸水を湛えて其處に天使の姿を映したく欲ふ者である。

余は第三に公平の人を好む、公平の人とは勿論無慾の人ではない、人に多少の慾のあるのは已むを得ない、公平の人とは他人の適當の慾を認め、其權利を重んずる人である、余は橫着い人を嫌ふ、即ち己を成るべき丈け無爲の地位に置いて、人をして成るべき丈け重き責任を負はしめんとする人を嫌ふ、余は人の

擔ふ丈けの責任は己も亦擔はんとする人を好む、公平とは、責任平分の意である、爾うして公平の人とは自から進んで責任を平分し、己の擔ふべき分を擔はんとする人である、余は斯かる人を好む、責任の輕きを貴び、之を避くるを得たればとて喜び且つ誇る人は余の大嫌ひな人物である。

余は第四にノーブル（高氣）なる人を好む、ノーブルとは英語であつて、是に適當な譯字がない、ノーブルに豪氣の意味がある、爾うして小事に頓着しない點に於てはノーブルは確かに豪氣である、然しながら豪氣は時には不品行である、放縱である、彼は善く飲み、善く談じながら、彼の妻子が饑渇に迫つて居ることを知らない、爾うしてノーブルとは斯かる無慈悲なる豪氣ではない、ノーブルに亦高潔の意味がある、爾うして利慾の念を離れ俗事に拘泥しない點に於てはノーブルは確かに高潔である、然しながら高潔は屢々獨尊である、情

のない潔白である、彼は秋の月の如く、皎々たるも而かも冷かである、爾うしてノーブルは高きと同時に温かである、高潔に温情を加へたもの、是れがノーブルである、爾うして余は斯かる豪氣なる斯かる潔白なる人を好む。

國のため、人のため、社會のためとなれば時々自己を忘るゝ人、何故か其理由は知らざれども、或る動機に觸れて、知らず識らずの間に或る無私の行爲に出る人、是れがノーブルなる人であつて余の好む人物である、ノーブルなる人の反對は冷算の人である、自覺の觀念の餘りに強きより自己を忘るゝことの出來ない人である、詩人と云ひ、預言者と云ひ、皆なノーブルなる人である、彼等は冷靜なる哲學者ではない、又、周到なる政治家でもない、彼等は世に所謂智者ではない、彼等は或る時は前後を忘れて動く者である、天啓に接せし盲人の如き者である、彼等は何を言ひつゝある乎を知らない、又何を爲しつゝある乎を知らない、彼等は自己を高き或他の勢力に委ねし者である。

此高尚なる盲目的なる所のない人、何事も自覺し、何事も精算し、何事も探り究めざれば爲さない人、注意一方の人、是れ余の好まざる人物である、余は時には猛進する人を好む、余は時には哲學を離れて詩的觀念を以て動く人を好む、余は科學と常識とを貴ぶが、然し科學のみの人を好まない、余はグラッドストンのやうな時には政略を忘却する政治家を好む、アガシのやうな研究室に入つて神に感謝の祈禱を捧ぐる科學者を好む、すべて貴きこと、すべて眞なること、すべて義しきことに對しては滿腔の同情を表する人を好む、詩歌のない人物、殊に詩歌のない宗教家、是れ余の耐へ難い人物である。

余は第五に獨立の人を好む、獨立の人とは孤獨の人ではない、勿論唯我獨尊の人ではない、獨立の人は高慢になり易い、然し獨立の人は勿論高慢の人であつてはならない、獨立の人は先づ第一に神と自己とに賴る人である、神の偉大なる援助力を信じ、また神が自己に賜ひし驚くべき耐忍力を信ずる者である、獨

立の人とは他人の援助と言へば悉く之を斥くる者ではない、彼は神と自己とを信ずるの餘り、他人の援助を多く要せざる者である、神は慧き造物主であるから、彼は決して吾人各自を他人に賴らなければ何事も爲得ない者としては造り給はない、神の造り給ふた人類は各自完備したる一小宇宙である、獨立は人たる者の本性であつて、獨立せざる者は言ふまでもなく一人前の人間ではない、聖書に於てさへも爾曹は神なりと書いてある（約翰傳十章卅四節）、我等は或る意味に於ては確かに神である、即ち獨り自から或る確實なる事を行ふことの出來る者である、然るに此事を忘れて、「人は社交的動物なり」との希臘の哲學者アリストートルの言を楯に取り、依賴を恥とせざる人の多きは實に驚くべきの限りである、余は依賴の人を一人前の人とは見做さない、彼は半人前の人か、或ひは四分の一の人である、斯かる人の好ましからざるは言ふまでもない。

余は第六に勞働の人を好む、讀書の人、美術の人、音樂の人、演說、說敎の人

を好まないではないが、然かし、鍬を取り、槌を振り上げる人に較ぶれば、余の彼等を好むことは至つて少ない、余の嫌ふ人とて懶け者の如きはない、余は懶惰は大罪惡であると信ずる、世に最も神聖なるものは高壇に立て説教することではない、田園に出て働くことである、働かない者は神を知らない、神に就て最も疎い者とて神學者教役者の輩の如きはない、故に余は勞働者を愛する丈けそれ丈け世に所謂る宗教家なる者を嫌ふ。

其他余の好き嫌ひを言へば數限りない、然かし是等は先づ余の嗜好の主なる者である、斯く言ひて、余は自身己の理想に合ふ完全無缺の者であると信ずるのではない、余は度々己の理想に反し、己れと己れを忌み嫌ふ者である、如何なる嫌惡でも己れに對して懷く嫌惡の如くに辛らいものはない。

余の好む人物は斯の如しであるとして、扨斯かる人物は何處に居る乎と云ふに、何所にでも居る、政府部内にもあらう、然かし多くはあるまい、民間の政治家

の中にも一人や二人はあらう、教會内にもあらう、然かし余は不幸にして其處に多くを見ない、ノーブルであるとか、獨立であるとか云ふことは余の見た所では今の基督教會内には至て尠ない、否な、ノーブルであれば今の教會には居たまらないのが常である、若し獨立を主張すれば宣教師には嫌はれ、宣教師學校よりは逐はれる、今の基督教會なるものは高氣、獨立を養ふ所ではない。

余は余の好む人を最も多く平人の中に發見する、百姓の中に、職工の中に、町人の中にの關係だも有たない人の中に發見する、政府にも政黨にも教會にも何發見する、所謂る學生の中には餘り多く見ない、學生は少しく學問を修むれば直に生意氣になる、同時に懶ける、學問を繼けたさに、主義を賣り、獨立を捨てる、社會の狀態に省み、己の地位の安全を計らんため、萬事に注意深くなりて、言ふべきことをも言はず、言ふべからざることをも言ふやうになる、學生の最大多數は少しばかりの學問と身の快樂とのために己の自由と靈魂とを賣る

者である、今の社會に於て最もunheroic（非勇）なる者は學生の中に多い、余は容易に今の學生を信ぜざる者の一人である、斯く云ひて余は勿論愛すべき學生のあることを疑はない、然かし其發見の非常に困難なるを見て、一層深く今の學生社會の腐敗墮落を感ずる者である。

余は自身が基督信者であるから余の好む人は重に基督信者の中にある乎と云ふに決して爾うではない、否な、余は余の最も好まざる人を基督教信者の中に發見する、熱心家と稱して科學的常識に全く缺乏する人、韜晦を愛して透明を避くる人、否な、透明を暗愚なりとて嘲ける人、非常にずるい人、依頼の人、懶ける人、是れ余が今の基督教會に於て遭遇する人物である、余も多分彼等の眼から見たらば缺點だらけの人であるだらう、然かしながら余が今の基督教會なるものに耐へられない理由は余一人が惡いからばかりではないと思ふ。

之に反して余は余の甚だ好む人を基督教界以外に於て發見する、余の最も好む

人の一人は西本願寺派の某僧侶である、余と非戰論を共にして永く世の嘲笑を受けし人は激烈なる基督教の反對者である、其他余の友にして宗教問題には至て冷淡な人も多くある、余は勿論余の信仰を維持する上に於て彼等の主張には一歩も讓らない積りである、然しながら友誼は友誼であつて信仰は信仰である、是れ斯世の逆説の一つである、[illegible]は死すとも我等の信仰を棄つることは出來ない、然ればとて我等の好ま[illegible]を友とすることも出來ない、宗教と友誼とは全く別物である。

勿論同主義の人が同宗教を信ずるに至つて最も深い友誼の起るのは言ふまでもない、而して余も幸にして少しは斯かる友人を有つ、「我等の心をキリストの愛に於て結ぶ其愛は祝すべきかな」、是れ友誼の最上である、然しながら斯かる友誼は金剛石が稀れなるが如く稀れである、爾うして金剛石を瓦礫の如くに與へ給はざりし神は斯かる友人をば夥多賜はらない、之を一つか二つ有てば充分で

ある、嗚呼キリストに在る友人！我何を以てか之を評價せん。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

人その友のために己の命を捐つるは之より大なる愛はなし、すべて我、汝等に命ずる所の事を行はゞ則ち我友なり、今より後、我、爾曹を僕と稱ばず、そは僕は其主の行すことを知らざればなり、我、先きに爾曹を友と呼べり、我、汝等に我父より聞きし所のことを盡く告げしに據る（約翰傳十五章十三、十四、十五節）、

是れは貴いキリストの言葉であ、世に最も親密なる關係は親子でもなければ、兄弟でもなければ、夫婦でもなければ、君臣でもなければ、師弟でもなければ、君臣でもなければ、同政黨員でもなければ、同敎會員でもない、世に最も深い關係は友人の關係である、すべての關係が友人の關係となるまでは永久の關係となることは出來ない、父子もたがひに友人となりて最も親密なる父子となるのである、兄弟も夫

婦も君臣も師弟も同じことである、我等は夫婦たるよりも先づ友人でなくてはならない、君臣であるよりも先づ友人でなくてはならない、神でさへも我等卑しき人間と深き關係に入らんと欲せば先づ我等と友人の關係に入り給ふ、友人とならずして政黨員となりたればとて、敎會員となりたればとて何んでもない、余輩が今の敎會なるものに重きを置かないのはその友人の關係に成つたものでないからである、監督あり、牧師あり、執事ありて今の敎會なるものは小政府であつて、家庭ではない、友誼的團體たる倶樂部ではない（語弊はあるけれども）、斯かる所は靈魂を養ふ所ではない、今の敎會なるものは裁判所の一種である、吾人の缺點を指摘詰責せらるゝための所である、誰が斯かる所に安堵して居らうぞ。

然しながらキリストの敎會は素々斯かる者ではなかつたらうと思ふ、敎會とは實に友人の團體であつたのであらうと思ふ、則ち友誼てふ人間の最も深い關係

に由て縛がれた團體であつたのであらうと思ふ、其建設の初期に方て之に非常の發達力のあつたのは全く之がためであつたらうと思ふ、然るを後世の「宗教家」なるものが出て、此神の造り給ふた美はしき友人の團體を政府の一種に變じて了つたのであらうと思ふ、余の靈魂は實に斯かる教會を要求する、余はキリストの友となりて、また彼の友を余の友として有ちたく欲ふ、嗚呼、斯かる教會を今日起すことは出來まい乎。

然かし若し今日直に、友人の教會、又は教會の友人を有つことが出來ないならば、余は教會なくとも友人を有ちたく思ふ、教會の無いのは忍ぶことが出來る、然し友人の無いのは忍ぶことが出來ない、故に余はキリストの教會の建つのを俟ちつゝある間は、すなはち少しなりとも其建設に貢獻しつゝある間は、余の靈魂の墓ふ少數の友人を余の心の奥室に迎へ、其處に出來得る限り彼等を歓待して、此冷酷なる世に在る間、天國に在るが如き聖き靈交を味はひたく欲ふ。

スチーブン・ジラードの話

STEPHEN GIRARD.

明治四十三年六月四日故今井樟太郎氏永眠四週年期に際し相木今井館に於て述べし所なり。

世に不幸なる人は澤山にありました、然し私が今晩お話し致さうとする所のスチーブン・ジラードの如くに不幸なる人はありません、世に誤解された人は澤山にあります、然し彼れジラードの如くに誤解された人は無いと思ひます、ジラードの傳を讀みまして私共は世の批評なる者の何の當にもならない事を知るのであります。

スチーブン・ジラードと云ひますれば、其人の誰なる乎をさへ知らない人が多くあります、若し孤兒の友と云へば何人もジョージ・ミラーを語ります、然しながら茲にミラーに勝るも劣らざる孤兒の友のありしにも關はらず、大抵の人

は、殊に大抵の基督信者は、其何人なる乎を知らないのであります、何人も北米合衆國の建設者としてはワシントン、フランクリンの名を口にします、然し茲に彼等の友人にして彼等にも劣らざる米國の愛國者がありしにも關はらず、大抵の人は其何人なりしかを知らないのであります、若し普通の人名字書を引いてスチーブン・ジラードの條を見ますれば大略左のやうな事が書いてあります、

スチーブン・ジラード　守錢奴にして慈善家なり、ボルドー附近に生る、船長の給仕より昇進して、運轉士、船長となり、終に米國沿岸航行船の共同持主たるに至れり、一七六九年貿易商人としてヒラデルヒヤに土着し、此處に一銀行を設立し、一八一二年より一八一八年に渉る戰爭中(英國に對して開かれし者)財政的に合衆國政府を扶て功あり、ジラードは宗教に於ては無神論者、個人的習性に於ては守錢奴なりき、云々(チェムバー人名字典)。

守錢奴にして無神論者、斯の如くにして彼は一般に知らるゝのであります、然かも今日に至り公平なる歴史の研究に由て彼の稀有の愛國者にして慈善家なりし事が判明つて來たのであります。

而して彼が彼の死後殆んど八十年間(彼は一八三一年に死ました)世人に斯くも誤解され來りしには深き譯があつたのであります、それは彼が不幸にして世にも最も稀なる惡しき傳記者を有つた事であります、彼が曾て彼の銀行に傭ひし一人の事務員がありました、其者が何にか不都合の廉があつて主人に解雇されましたが、其事を非常に怨恨に思ひ何時か之を報ひんと思ひ居りましたが、ジラードの死するや彼の思附きし事は彼が舊の主人の傳記を著はして、彼の名譽を彼の死後に於て傷けんとする事でありました、而して此惡しき事務員に由て書かれし『ジラード傳』なる者が米國の社會の受くる所となり、ツイ此頃まで此書が此人に關はる唯一の據典であつたのであります、而して誹毀を目的とし

書いた此書が其主人公に就て善き事を傳へやう筈はありません、殊に彼れジラードが當時の基督教會に反對し、教會の牧師傳道師等たる者は何人と雖も彼の設立にかゝる孤兒院の門を潜るを許さずとの遺言をさへ彼は遺せし程でありましたから、教會は喜んで彼の誹毀者の言を聽き、彼れジラードは孤兒のために其全財産を拋ちしと雖も、其心の中に於ては大なる惡人であつて、其隱れたる生涯に於ては憎むべき守錢奴であつたと信じて今日に至つたのであります、西洋諸國に於て基督教會に反對することは非常の事であります、此事を敢てして生涯に多大の損害を被つた者はジラード一人に限りません、彼の親友にして彼と共に人道と國事とのために盡力したトマス・ペイン其人の如きも同じ不幸なる運命に遭遇したものであります、彼れペインもツイ此頃まで「無神論者のトム・ペイン」として英米兩國の社會に知られ、基督教證據論を唱ふる者は彼等の想像に成る此人の死狀を畫くを以て常例とし來つたのであります、然るにモノ

キュア・コンウェーなる學者が出でまして、恰度カーライルが『コロムウェル傳』を著はして彼れ無冠王の寃を雪ぎしやうに、『トマス・ペイン傳』を著して彼れ「無神論者」の眞實を世に示しましてより、此神の敵、眞理の破壞者と思はれし人の第十八世紀第一流の志士仁人でありしとが明白に成つたのであります、昔時の猶太教會の後を繼ぎし今の基督教會が今尙ほ預言者を殺し、其死後の名までを傷けつゝあるは實に歎ずべき事實であります、然しながら如何に有力なる教會と雖も終まで眞理を掩ひ隱す事は出來ません、神は公平なる歴史家を送りて死者を甦し、隱密を顯明になし給ひます、而して斯くの如くにして近世に至り永き年月に渉りし誤解を解かれ、汚名を雪がれ、再び世界の偉人の中に仲間入をする事の出來し人の一人が私が今晩此處に皆樣に談らんとするスチーブン・ジラードであります。

スチーブン・ジラードは、千七百五十年を以て佛國ボルドーに生れ、千八百三

十一年、七十一歳の齢を以て米國ヒラデルヒヤに於て死にました、彼は如此にして佛蘭西生れの亞米利加人であります、人は其生國にあらざれば之を愛する能はずとの通言は亦ジラードの場合に於ても破れました、

人が自由のために戰ふ所
其所に我が本國あり

との詩人ローエルの言はジラードの場合に於ても亦事實となりて顯はれました、彼は佛蘭西に生れ、佛蘭西人の情性と知識とを具へながら、其全生命を太西洋の彼方なる新自由國のために獻げました、而して斯く爲して彼は彼の本國の名を一層高く世界に揚げたのであります。

彼の家は貧しき漁師でありました、無學で、迷信で、粗野で、何の長所もない者等でありました、隨て家に愛情のあるでなく、子供はたゞ天然に生育ちし外に、何の敎養をも其父母より受けませんでした、スチーブンは長子でありまして、

敎會附屬の小學に通ひ、僅かに讀書を學びし外は何の敎育をも受けませんでした、搗て加へて彼は早く其實母を失ひ、繼母に事へねばならぬ狀態となり、其脛と股とは少數からぬ彼女の笞の的となつたとの事であります、若し誠に幼時の境遇が人を作るものでありますならば、ジラードは確かに殘忍酷薄の人となつた筈であります、世界第一の孤兒の友が、兩親の愛とては何も知らざりし此不幸兒より起りしを知りまして、私共は人は境遇の玩弄物でないことを知るのであります。

ジラードは家にありて立身の途を看出すことができませんでした、故に彼は當時ボルドー港に碇泊中の西印度通ひの或る帆船に投じ、茲に彼の運命を試みんとしました、彼は心の中に思ひました、「我れ隱れて船に乘り、發見されて後に海に投入らるゝも、是れ我に取りて最も惡しき運命にあらず」と、憐むべし、眇たる一青年、家に在るの苦痛に堪へずして、生命を賭して夜に乘じて船に忍

入り、身を貨物の間に匿して、翌朝船の陸を離れしを待て、匐出て船長の憐憫を乞ふたのであります、然るに何ぞ計らん、殘忍と思ひし船長はいとも優さしき人でありました、彼は未だ年若き青年でありましたが、ジラードを見て、親切に彼を撫恤はり、直に彼を船室給仕として使ふ事に致しました、ジラードは生れて茲に始めて友人を發見しました、船長室に入りて見れば、茲に當時の思想家ヴォルテヤの著書が表裝嚴しく並んで居ました、彼は之を讀むの特權を與へられました、此處に彼の高等教育は始まりました、廣き海と、親切なる船長と、博き自由の思想とがありて、此處に屈みたる、縮みたるジラードの靈は其發育を始めました、彼の才能は速に認められました、給仕は水夫となり、水夫は士官となり、士官は終に船長となりました、彼は歳二十二にして船長の免許を得ました、太西洋は彼の家となりました、西印度、ニューオリエンス、ボルチモア、費府、紐育と彼の船は其間を駛て、彼は自身船を行ると同時に又貿

易に從事しました。

彼は本據を費府に据へました、而して此處で或るフトした事より或る婦人を娶て妻とする事になりました、然るに家庭に於ては元來不幸なりしジラードには又幸福なる家庭は來りませんでした、彼の妻は結婚の翌年より不治の憂鬱症に罹りました、彼女は精神病院に送られました、而して茲に三十八年の間、夢の生涯を送りました、シカモ忠實なるジラードは彼女を見棄ず、毎月一回必ず彼女を病院に見舞ひ、死に至るまで彼女を慰めて止みませんでした、斯くて母の愛を知らざりし彼は又妻の愛をも知りませんでした、攝理は此情深き人に對して甚だ無情でありました、然かも彼は厭世家とはなりませんでした、彼は茲に彼れ自身が得る能はざりし愛を彼と等しき境遇に在る者に與へんとの決心を起しました、彼は己も苦しめられたれば人をも苦しめんとの卑しき根性を有ちませんでした、彼の家は貧しくあり、彼の成育は低くありましたが、彼は其心の底

に於て紳士でありました、彼は教會にも屬せず、世の信者には無神論者として認められましたが、心は確かにナザレのイエスのそれでありました。

彼が費府に土着するや否や米國の獨立戰爭が始まりました、而して船員にして商人なりし彼は戰場に出て功を立つることは出來ませんでした、彼は又ヴォルテヤの弟子でありましたから大の非戰論者でありました、商賣は出來ず、戰爭には出られず、彼は唯彼の店に潛んで戰爭の終るを待て居ました、而して千七百八十三年に平和成るや茲に彼の大活動は始まりました、彼は戰爭最中、船價の下落するに乘じて更らに新たに船舶を買入れました、彼は彼の船に彼の理想の人物の名を附けました、其一をヴォルテヤ號と稱しました、其第二をルッソー號と云ひました、其第三をモンテスキア號と呼びました、孰れも佛國當時第一流の思想家でありまして、自由を唱へ、人道を鼓吹した人等であります、其所有の商船に文豪、哲人、法學者の名を附けし彼れジラードの人物は是にても

稍や察することが出來ます。

戰爭止むや否や、彼は二艘の船に滿載するに米國特產の綿並に穀類を以てし、其船長に命じて曰ひました（彼は今船主となりて陸に在りて船長を指揮する身となりました）、

先づボルドーに到り、米國積の貨物を賣却し、其代價を以て直に葡萄酒と果物とを買ひ、之を積みて聖彼得堡に到るべし、此處にて又之を賣却し、其代價を以て麻を鐵とを買ひ、アムステルダムに到りて之を賣るべし、而して又此處に新たに雜貨を買入れ、遠く印度カルカッタに到るべし、而して此處に又之を賣り、絹と茶と珈琲とを買入れて米國に歸るべし

と、實に其當時に在りては大膽なる商賣でありました、米國より佛國へ、佛國より露國へ、露國より和蘭へ、和蘭より遠く希望峰を廻りて印度カルカッタに到り、而して後に米國に歸り來れとの命令でありました、而して此命令は文字

通りに果たされまして、ジラードは之に由て莫大の利益を占めたさうであります。

斯の如くにして富は富の上に累積りました、而して千八百十二年、英米第二回の戰爭の始まる頃には彼の富は積んで百萬弗以上に達しました、彼は米國が作りし最初の大富豪でありました、政府に頼るでなく、官權を利用するでなく、唯大膽なる行動と、正直と節儉とに由て、彼は船室給仕よりして終に此地位に達したのであります。

ジラードは商人でありました、而して商人としての彼の目的は利得にありました、而して歳々積り行く彼の財産を見て彼の隣人は曰ひました、彼は吝嗇漢である、守錢奴であると、彼はワシントンの如き軍人ではありません、又フランクリンの如き學者ではありません、又ジェフハソンの如き政治家ではありません、緡銖を爭ふ普通の商人であります、彼の矮き體軀と眇の一眼とを見まして、

彼に敬畏すべき所は一ッもありませんでした、然し此醜き體軀の中に如何な崇高い靈魂が宿て居つたか、其事は平常は分りませんでした、然し適當の機會に遭ふて、此「吝嗇漢」、「無神論者」は彼の本質を顯はしました、或る年の事でありました、ヒラデルヒヤに疫病が流行しました、發黄熱は全市を襲ひました、全家擧て死するもありました、死體は積んで山を爲しました、夜な夜な荷馬車は市街を廻り、「死骸をお出しなさい」との凄き叫號が聞えました、此時市民は恐怖に襲はれ、誰れ一人他を助けんとするの心を起しませんでした、而して此時に吝嗇漢と云はれしジラードは毅然として起ちました、平生は曾て歌ひしことなき此人は今は歌ひました、舞踏しことなき彼は舞踏りました、彼は市民に告げて曰ひました、

恐るゝ勿れ、恐怖が唯一の惡魔なり

と、彼は卒先して避病院を組織し、自身の馬車を驅て病家を訪ひ、自身死體を

擔ぎて之を病院に運びました、平常は利益の外、何をも思はざるが如くに見えし彼に、今は無慾の外に何も認められませんでした、彼が彼の事へし船長の室に於て學びしヴォルテヤの人道哲學は今や實行となりて彼に於て現はれました、彼は他人を死より救はんとして自身の死を忘れました、彼は其時戲れて曰ひました、

若し死が余に追附くならば、彼は其時余の多忙なるを見るならん

と、彼は他人のために忙殺されて自己を忘れました、故に死は彼に追附きませんでした、多くの死體を手にしながら彼は疫病に取附かれませんでした。費府の市民は彼に駭かされました、然し更らに驚くべきことが彼に於て現はれました、守錢奴と云はれし彼の義俠は單に地方的でない事が分りました、千八百十年に恐慌は米國の經濟界を襲はんとしました、合衆國の信用は將さに地に墜んとしました、此時に當り、ジラードは彼が英國倫敦なるバーリング兄弟に

預け置きし百萬弗を引出し、之を資金の缺乏せし合衆國銀行に預け換へました、彼の大膽なる此行動に由りて信用は恢復し、恐慌は其猛威を挫かれました、今でこそ世界第一の富國なる米國の財界も今より百年前に在りてはジラードの百萬弗に由て救はれたのであります。

千八百十三年、第二回の英國との戰爭の終らんとする頃、合衆國政府は大に資金の缺乏を感じ、五百萬弗の公債を發行して之を補はんとしました、然し戰爭最中の公債募集に應ずる者は甚だ少くありました、五百萬弗の募集に對して應募額は僅かに二十五萬弗、之を見し米國人は曰ひました、米國は今や再たび英國の屬國とならんとす、と、此時に當り又眇のジラードは起ちました、彼は言ひました、

余は自由に於て、公道に於て、教育に於て、米國合衆國が世界第一等の國たるを見んと欲す

と、而して若し金を以て此國を救ひ得るならば彼は彼の全生涯を以て作りし全財産を棄つるも敢て吝みませんでした、彼は合衆國政府に申込んで言ひました、

余は五百萬弗の全額を引受くべし

と、而してジラードの此決心を見し米國人は又心を翻へして曰ひました、

利を見るに慧しき老ひたるジラードの應ずる公債に危險あるべからず

と、斯くて我も我もと云ひて之に應じたれば、公債募集は大成功を以て終りました。

今でこそ僅かに五百萬弗であります、然し百年前の五百萬弗はカーネギーの今の五億弗に劣りません、ジラードは之を悉く投棄て國を救はんとしたのであります、商人が國を救ふの途は茲に在ります、軍人計りが愛國者ではありません、國は軍人に由てのみ救はれません、商人も亦愛國者であります、彼は時には彼の生命よりも尊き彼の全財産を投出さなければなりません、而してジラードは

此事を決行したのであります、而してワシントンが劍を以て、フランクリンが外交を以て、ジェフハソン、ハミルトン、ジョン・アダムス等が政治を以て合衆國を救ひしやうに、彼れスチーブン・ジラードは金を以て之を其初期に在りて最も危險なる時に救ふたのであります。

彼の生涯は其終焉に近づきました、彼は作り得る丈けの財産を作りました、彼は數々之を彼の國のために投出しました、乍然、是は失はれずして、反て增殖して彼の手に歸りました、此より彼は其使用の途に就て考へました、彼は之を讓るべき子孫を有ちませんでした、然らばとて彼がヴォルテヤより學びし人生觀は彼をして之を己が身の上に費すことを許しませんでした、此點に於てジラードは我國の紀伊國屋文左衛門と全く違ひます、兩者とも百萬の富を積んで之を一生涯の間に消費はんと決心しました、而して兩者とも其目的を達し、紀伊國屋は之を遊廓に於て消費し、再び元の貧者となりて世を終りました、然しジ

ラードには紀伊國屋に無い人生哲學がありました、彼は所謂「基督信者」ではありませんでした、彼は世の所謂宗教家を嫌ひました、彼は佛國當時の哲學者ヴォルテヤ、ルッソー、モンテスキアを師として仰ぎました、而して彼等より受けし理想を此世に於て實行せんとしました、而して其理想とは人類の向上でありました、神と宗教とを多く口にせざりし彼は人類に對しては非常の熱心を懷きました、故に彼は彼の同國人アウグスト・コムテのやうに彼の所有のすべてを人類の祭壇の上に獻げました。

彼の富は此時三百萬弗以上に達しました、而して此富の大部分を以て彼は彼の理想の學校を建つるに決しました、彼れ自身は學校に學びし人でありませんでしたが、彼は非常に子弟の教育を重じました、前にも述べましたやうに彼の愛する北米合衆國を教育に於て世界第一等の國となさんとは彼の理想でありました、彼の友人の中にフランクリンが有ました、彼は既にペンシルバニヤ大學を

起して茲に學理穿攻の途を設けました、然しジラードの理想は他にありました、彼は學者を作らんよりは寧ろ善き平民を作らんとしました、彼の友人の中に又トマス・ジェファソンがありました、彼は非常の平民主義の人でありまして、今やピルジニヤ州の彼の庵廬に在りて著述に從事して居りました、ジラードは彼に教を乞はんために、一時彼の業を放棄し、二週日の間彼れジェファソンの側にありて平民教育の奥義を學びました、有つ物を與ふるは易し、然れども能く其途を講せずして之を與ふる者は與へて反て害を世に遺す者であります、ジラードは理想的の慈善家でありますが、彼は得し時と同じやうに思考を凝らして之を與へました、彼は永き將來を慮り、最善の途を見止めて而して後に其全財産を喜捨しました。

彼は彼の全財産を左の如くに分配しました、

ヒラデルヒヤ病院へ　三〇、〇〇〇弗

ペンシルバニヤ聾啞學校へ	二〇、〇〇〇弗
ヒラデルヒヤ孤兒院へ	一〇、〇〇〇弗
ヒラデルヒヤ公立學校へ	一〇、〇〇〇弗
貧者への薪炭補給費としてヒラデルヒヤ市へ	一〇、〇〇〇弗
メソニック貸金協會へ	二〇、〇〇〇弗
市街改良費としてヒラデルヒヤ市へ	五〇〇、〇〇〇弗
ヒラデルヒヤ市立圖書館へ	四〇、〇〇〇弗
ペンシルバニヤ州運河改良費として	三〇〇、〇〇〇弗
ジラード高等學校設立費として	二、〇〇〇、〇〇〇弗
總計	二、九四〇、〇〇〇弗

斯て彼の遺産の大部分を受けし者はジラード高等學校でありました、是れが彼の理想を施さんがために成りし平民の學校であります、然し名は普通の學校で

ありますが、實は大なる孤兒院であります、彼れジラードが孤兒に等しき者でありました、故に彼は彼の平民教育を特に寄方なき孤兒の上に施さんとしました、而して之に收容されし孤兒は十八歳まで普通教育を受けます、然し其教育の大部分は讀書ではなくして手工であります、學究の設備は充分でありますが、それよりも完全なるは手工の設備であります、ジラード高等學校は一大職工場と見て差閊ありません、此處に普通の米國人が貴尊にして獨立なる生涯に入るための設備は悉く具つて居ります、而して現今此校に在りて其恩惠に與かる兒童は凡そ三千人、乳兒より青年男女に至るまで、其體育、智育、德育が、最も進歩したる學說に從ひ、最も有効なる方法を以て無代價にて施されつゝあります。

ジラード高等學校のために遺されし資金は二百萬弗でありました、而して之にジラード所有の土地家屋等を加へて悉く之を其使用に供しましたが故に今日に

至りては其所有財産は積りて二千萬弗餘（四千萬圓餘）の巨額に達し、此種の學校として其基金の豐富なる世界第一たるに至りました、世界の孤兒院中ジラード高等學校のみは未だ曾て一回も資金の缺乏を感じたことはありません、此孤兒院のみは未だ曾て一回も此世の慈善家に寄附を哀願した事はありません、ジラードカレッジのみは資金常に有り餘りて時には其使用に苦むことがありました、曾て私がその參觀に行きました時に、私の案内者が、私を中央なる博物室の屋根にまで携行き、巨大なる純白の大理石の瓦の代りに用ひらるゝを指して私に告げて曰ひました、

此等の大理石は曾て本校の資金に剩餘を生じ其使用に苦みし時に、管理人等が買求めて屋根を葺かしめた者であります、世界廣しと雖も鈍白の大理石を以て屋根を葺いた學校とては此學校を除いて他にはありますまい

と、實に盛なりと謂はざるを得ません、世には祈禱を以て維持せらるゝ孤兒院

はあります、又間斷なき哀求と孤兒自身の勞働とに由て僅かに維持を繼くる孤兒院は尠くありません、然るに茲に常識と先見とに由て成りし殆んど千古不易と稱しても可いやうな孤兒の學校があるのであります、スチーブン・ジラードは孤兒教育に於て新紀元を開いた者であります、若し世の孤兒の友が悉く彼の如くに其心情と理性とを用ひますならば、孤兒院をして常に起つか倒るゝかの境に立て僅かに其憐むべき存在を繼くるやうな狀態に陷らしむることはないと思ひます。

前にも述べましたやうに、ジラードは基督教に對しては至て冷淡でありました、實にジラード學校の特質の一ッとして常に世人の注意を惹きますことは、建設者の遺言に基き、基督教會の教師たる者は、其何派に屬するを問はず、何人も其内に入るを許さずとの堅き定規であります、斯くしてジラード學校は平民教育のために建てられし學校でありまして、人は何人も自由に之を參觀すること

が出來ますが、然し監督とか、長老とか、牧師とか、傳道師とか稱する者は何人も其門を潛る事が出來ないのであります、彼等教會の教役者が其門に近づきますれば、門衛は直に彼等を誰何します、而して彼等が教職に在る者であることを見止めますれば彼れ門衛は無遠慮にも聲を厲まして言ひます、

足下は此内に入ることは出來ません、此所は教會の教師の參觀を許しません、

と、而して山高帽子を戴き、フロックコートを着、白き襟飾に其聖職を示す宗教家は一歩も其中に入ることが出來ないのであります、世界廣しと雖も牧師傳道師入るべからずとの禁制を設けし學校は多分之を除いて他にありますまい。

然らばジラートは果して教會の人が言ひしやうな無神論者であつたでありませう乎、私は爾うは思ひません、彼の先生のヴォルテヤも爾う呼ばれました、然もヴォルテヤの無神論者でなかつたことは今日は善く分りました、米國の進化哲學者として有名なるジョン・フィスク氏の如きは斷言して居ります、

ヴォルテヤは佛國當時の唯一の敬神家なり、

と、ジラードの親友なりしトマス・ペインも永年の間「無神論者のトム・ペイン」の綽號を受けました、然るに彼が基督教を轉覆せんとて書きしと云はる、『道理の世』なる書は其發端に於て左の言辭を載せて居ります、

余は一個の神を信ず、其餘を信せず、余は今世の後に來る幸福を希望す、余は人類の平等を信ず、余は又人の宗教上の義務の、正義を行ひ、慈悲を愛し、我等の同胞を幸福になすべく務むるにあるを信ず、

と、是は無神論者の言としては如何しても受取れません、然るに基督教會は彼の死後百年の今日に至るまで無神論者として彼を迫窮して止まなかつたのであります、同じやうにジラードも屢々「攝理の教導」なる語を用ひて居ます、彼が神の聖名を呪ひし事ありとは私の曾て聞かない所であります、私の信じまするに彼はヴォルテヤ、ペイン等と均しく彼の在世當時の教會の基督教に反對し

たまでゞあります、而して此意味に於てカーライルも無神論者であります、トルストイも無神論者であります、其他多くの貴い人は無神論者でありました、而して今猶ほ無神論者であります。

誠に西洋諸國に於て無神論者と稱せらるゝ者は我國の無神論者とは全く違ひます、我國に於ては無神論者とは神の存在を否み、神なし靈魂なしと唱へて肉慾と野心とに驅られて其生涯を送るものであります、然し西洋諸國に在りては無神論者とは所謂「有神論」に反對する者であります、現實的に言へば基督敎會に反對する者であります、故に西洋にありては無神論者は大抵は其實際的道德に於て敎會信者に劣らない者であります、米國に於てロバート・インガーソルの如き、英國に於てチャーレス・ブラッドローの如きは實に無神論者と呼ばれながら模範的の紳士でありました、彼等の正直なりしこと、彼等の所信を實行するに當て勇なりしこと、彼等が平和を愛して戰爭を憎みしこと、常に貧者と

弱者の友たりしことに於ては彼等は多くの點に於て所謂「基督信者」に勝りました、彼等は誠に基督信者以上の人と成らんと努めた人でありました、故に敎會を嫌ひ、信者を避けたのであります。

然し告白よりも實行であります、彼等無神論者と稱へられし人々は基督敎を口には唱へませんでしたが、之を身に實行致しました、ジラードの如きは確かに其一人であります、若し彼がキリストの聖旨に合はない者でありますならば誰が合ふ者であります乎私は知りません、彼の如き者の世に在るを知り給ひたればこそキリストは其弟子等に敎へて曰ひ給ふたのでありませう、

我を呼びて主よ主よと曰ふ者盡く天國に入るに非ず、唯之に入る者は我が天に在す父の旨に遵ふ者のみなり、

と、斯くて最後の裁判の日に於て有神論者と無神論者とが主の臺前に立ちます時に聖書の左の言辭は事實となりて現はるゝのでありませう、

人の子其榮光を以て臨り、諸の天使彼と共に在る時、彼は其榮光の位に坐せん、其時萬國の民は其前に集められ、彼は牧者が綿羊と山羊とを別つが如くに彼等を別たん、彼は其右に綿羊を置き、左に山羊を置かん、斯くて王其右に居る者に曰はん、

來れ、汝等我父に惠まるゝ者よ、宇宙の石礎を据へられし以來汝等の爲に備へられし國を嗣げよ、其は我れ飢し時に汝等我に食せ、我れ渴きし時に汝等我に飲ませ、我れ旅せし時に汝等我を宿らせ、裸なりし時に我に衣せ、我れ病みし時に汝等我を見舞ひ、我れ獄に在りし時に汝等我に就りたればなり、

と、其時義者は彼に答へて曰はん、

主よ何時我等は汝の飢えたるを以て汝に食はせ、渴きしを見て汝に飲ませしや、何時汝の旅せしを見て汝を宿らせ、裸なるを見て汝に衣せし乎、何

時我等汝の病めるを見て汝を見舞ひ、獄に在るを見て汝に就りしや

と、王答へて彼等に曰はん、

誠に我れ汝等に曰はん、汝等是等の我兄弟の最も微き者の一人に之を爲せしは是れ我に爲せしなり

と、遂に彼れ又其左に居る者に曰はん、

我を離れよ、呪はるゝ者よ、惡魔と其使者とのために備へられし燃ざる火に入れよ、其は我れ飢えし時に汝等我に食はせず、我れ渴きし時に汝等我に飲ませず、我れ旅せし時に汝等我を宿らせず、裸なりし時に我に衣せず、病みし時、又獄に在りし時に汝等我を見舞はざりき

と、斯くて彼等又答へて曰はん、

主よ、何時我等汝の飢え又渴き又旅し又裸に又病み又獄に在りしを見て、汝に事へざりしぞ

と、時に彼れ彼等に答へて曰はん、

汝等是等の最も微き者の一人に之を爲さゞりしは是れ我に爲さゞりしなり

と、斯くて是等の者は限なき刑罰に入るべし、而して義者は限なき生命に入るべし。(馬太傳廿五章卅一節以下)

下篇　非戰論の原理

毎年夏期は講談會を開くを例とす、然るに今年は之を爲さず、空しく夏を過さんことを恐れ、茲に机に對しながら數千の聽衆の我目前に在るを瞑想し、此演說文を草す。(明治四十一年八月)

學者の態度

私は今日は非戰論の原理に就て申上たく思ひます、併し本論に入るに先立て私は一言諸君に申上げて置かなければならないことがあります、即ち、私が非戰主義を懷くのは、私が悉く其眞理なるを證明し盡したからではないと云ふ事、其事であります、世の中の大抵の人は自己の奉ずる主義信仰と云へば之に一點の懷疑、一點の批難の加ふべきものゝ無いものであるやうに思ひます、然

し是れ眞理を愛する學者の持つべき心の態度ではありません、學者は懷疑を許します、批難を歡迎します、爾うして主張と批難とを較べて見まして、二者孰れか眞理の多い方を取ります、故に彼の提供する說は完全の眞理ではありません、斯かる眞理を提供し得る者は人間の中に一人も無い筈であります、我が奉持する眞理は完全の眞理なりと稱する者は神にあらざれば狂人であります、我等人間はより大なる眞理を供するまでゞあります、爾うして他人の批評を俟て更らに大なる眞理に達するまでゞあります。

私は今は非戰主義を懷きます、私は非戰論は道理として最も正しく、道德として最も高く、政略として最も慧き主義であると思ひます、併し斯く思ひますればとて非戰論に多くの批難すべき點が無いとは言ひません、其反對の主戰論にも亦多くの採るべき所があります、少くとも同情を寄すべき點があります、

私は非戰論を證明し悉したとは云ひません、之を宇宙進化の理から考へて見

ましても、又實際に之を行ふの點から考へて見ましても、之に多くの批難すべき點のあることを認めます、私はより大なる眞理として非戰論を採るのでありますが、絕對の眞理として之を懷くのではありません、爾うして若し諸君の中に、斯かる信念は是れ半信半疑の信念であつて聞くに足らずと言はるゝ方がありますならば、其方は公平を愛する學者の精神を有たない方と認めますから、私の講演中は今より直に此場を退かれんことを願ひます。

戰爭の惡事なること

却說、戰爭の惡い事であることは誰でも承知して居ります、如何に戰爭好きの人でも戰爭は善い事であると云ひ得る人は一人もありません、戰爭に對する普通の辯護は「戰爭は戰爭を止めることである」との事であります、漢字の「武」は戈を止るの意であるとの事であります、平和のための戰爭であつて戰爭のため

の戰爭ではないとは誰でも言ふことであります、故に私は茲に戰爭の惡い事を述ぶるの必要はありません、其事は世界一般に知られて居ります、恰かも賣淫制度の惡い事が一般に知られて居ると同然であります、誰も貨座敷は善いものであると云ふ者はありません、唯、惡いけれども止むを得ないと言ふまでゃあります、人類一般が其惡事なるを認める一點に於ては戰爭は賣淫と毫も異なりません、故に道德の立場から見て私は勿論戰爭を惡みます、然しドレ丈け惡むか、其れが問題であるのであります、憎惡にも强いのと弱いのとがあります、惡んでも恕して置く憎惡があります、之を排除せざれば止まない憎惡があります、貨座敷は惡いものであるけれども存して置いて左程害がないと云ふ憎惡と、貨座敷を存して置けば我家庭も社會も竟には國家までも滅びて了ふと云ふ激烈の憎惡とがあります、爾うして戰爭に對する私の憎惡は前の微温い憎惡ではなくして、後の激熱い憎惡であります、私は私の全心全性を傾けて之を嫌ひま

す、恰かも故ビクトリヤ女皇が之を嫌ひ給ひしやうに之を嫌ひます、傳へ聞く所に由りますれば彼女は老年に邁むに從ひ戰爭を嫌ひ給ふこと益々甚だしく、「朕は朕の在世中再び戰爭の宣告に署名せざるべし」とまで言張り給ふたこともあるさうであります、然るに英國の憲法に由り、民の欲する所は皇帝も亦之を可とせざるべからざる所より、止むを得ずかの最も不幸なる戰爭、南阿戰爭の宣告に署名し給ひしより、彼女の心常に安からず、終に彼女の崩御を數年早めたとの事であります、憎惡は勿論感情でありまして、道理を以て量るべきものではありません、併しながら感情にも高いのと低いのと、鋭いのと鈍いのとがあります、深い道德は鋭い感情を作ります、女皇陛下の戰爭に對する憎惡はヒステリー的であるとばかりは言へません、彼女は最も常識に富み給ふ婦人でありました、彼女の戰爭を嫌ひ給ひしは彼女と同時代同國の人なりし哲學者スペンサーが非常に之を嫌ひしと同一の原因に基くのであると思ひます、道理の

問題は別にしまして、小さき私も今は非常に戰爭を嫌ひます、私は今は英國非戰主義第一等の政治家なりしジョン・ブライトと共に言ひます、「人類の罪惡を一括せしもの、是れ戰爭なり」と。

戰爭と天然

併し人は言ひます、戰爭は廣く天然に行はるゝ所、戰爭は天然の法則であつて又進化の理であると、成程、戰爭は廣く天然界に行はれます、優勝劣敗の理は天然界至る所に行はれます、私は天然界に於ける戰爭の實在と、又或點から言へば、其利益とを認めます、乍併茲に一つ注意して置くべき事があります、それは天然の法則は戰爭にのみ限らない事であります、天然界には戰爭と共に協同一致も行はれます、愛憐犧牲も行はれます、萬物が進化して今日に至つたのは戰爭にのみ由りません、優勝劣敗を戰爭にのみ限るは極く淺薄なる天然觀で

あります、獅子は成程鹿や兎を食ひます、獅子と鹿と相對すれば勝利は勿論獅子に歸します、去れど鹿には獅子に無い者があります、群居の性があります、隨て多少和合一致、相互共濟の性があります、故に戰爭に於ては鹿は獅子に負けますが、蕃殖に於ては獅子は鹿に負けます、故に印度阿弗利加の地方に於て獅子が絶えても鹿の絶えない所が澤山あります、獅子は其牙と爪の鋭いために鹿に勝ちますが、其猛烈なる呑噬の性を有つために終には弱い鹿に負けます、天然界を修羅の街と見るは大なる間違であります、天然界は修羅の街ではありません、矢張り愛と正義とが最後の勝利を占むる家庭の一種であります。

廣く天然界を其大體に就て觀察して御覽なさい、其中で最も高い、最も貴い、最も美はしい物は、強い、猛しい、厖大なる者ではありません、若し力の一點より言へば最も強い者は王蛇と鱷魚とであります、然し誰が王蛇と鱷魚とが此世界の主人公であると言ひます乎、詩人ヲルズヲスの歌ふた牡鹿は弱く且つ脆

くありますが、然し遙かに王蛇、鰐魚以上の動物であります、鷲は一番強い鳥でありますが、鳥類の王は鷲ではありません、木蔭涼しき所に五色の錦繡を水面に映す翡翠は遙かに鷲以上の鳥であります、若し力の一點から言ひまするならば原始の人はゴリラ、チムパンジー等の猿猴類に遙かに劣つたる動物でありました、然るに此弱い人類が終に世界の主人公と成つたのであります、若し戰鬪的の優勝劣敗が天然界を支配する唯一最大の勢力でありますならば、此世界は今や全く王蛇、鰐魚、鷲、ゴリラ等に屬して居つたでありませう、然るに爾うではなくして、獅子や虎は絶ゆるも其餌物となりし鹿や兎は蕃殖し、鷲は山深く巖高き所に其巣を作るに代へて、翡翠は里に下て水邊を翔り、ゴリラ、チムパンヂーは僅かに熱帶地方の深林に其種屬を保存するに代へて、人は全世界を掩ふて至る所に文明を進めつゝあるのを見て、天然界は決して強者必盛、弱者必滅の世界でないことが最も明白に判かります、主戰論は之を天然界の事實

に訴へて其說を維持することは出來ません、天然を深く學んで、其戰爭の奬勵者でなくして、却て平和の宣傳者であることが明かに判かります。

歷史に於ける戰爭

然るに人は更らに言ひます、若し天然は平和を敎ふるとするも、人類の歷史は戰爭の必要を說いて止まない、戰爭なくして興つた國はない、人類の歷史は實に戰爭の歷史であると。

成程戰爭に由て國は興りました、然し其亡ぶるのも亦戰爭に由ります、戰爭は素々破壞性の者であります、故に他を破壞すると同時に自己をも破壞します、戰爭を以て他を破壞して置きながら己れは破壞を免がれんとするは出來るやうで出來ません、基督敎の聖書では「劍を採る者は劍にて亡ぶべし」と敎へ、佛敎の敎典では「呪詛諸毒藥、還着於本人」と說いて居ります、是れは神の法

律であると同時に又天然の法則であります、爾うして歴史在て以來此法則に洩れた人も國も無いと思ひます、和漢西洋孰れの國の歴史を見ましても此法則の働らきは明々と顯はれて居ります。

爾うして其理由は探ぐるに難くありません、戰爭は勢力の消耗であります、勝つも負けると同じく勢力の消耗であります、負くれば失ひし勢力を補はんとし、勝ては更らに進んで消耗の途を設けんとす、人も國も戰爭の方面に發達膨張して終に立つ能はざるに至ります、古きはアッシリヤ、バビロニヤ、マセドニヤ、羅馬の亡びたのも全く是れがためであります、新らしきは西班牙、佛蘭西の衰へたのも亦全く是れがためであります、國費の大部分は戰爭の方面に注がれ、才能の大部分も亦同一の方面に使用され、人物と云ふ人物、天才と云ふ天才が生産的でなくして消費的の軍事一方に引かれて、國は其根本に於て衰へ、甚だしきに至ては終に亡ぶるに至ります、國の寶は第一に其人物であります、爾う

して戰時に在ては之を戰場に消費し、平時に在ては之を兵營の中に圍い置きて國は發達せんとするも得ません、誠に希臘の亡びたのは全く連續せる戰爭の結果に由る人物缺乏が其最大原因であつたとのことであります、一時は大詩人、大哲學者、大美術家、大政治家を輩出して止まざりし希臘が今日の如くに衰へしは全く戰爭に由て人物を消費し盡したからであると言ひます、實に爾うであらうと思ひます、羅馬の滅亡も亦同一の理由を以て說明することが出來ます、一時は世界の半を握りし西班牙が三百年後の今日世界の第三等國とまで下りましたのも全く引續く戰爭に由て國の第一の寶たる人才を消費し去つたからであります、佛國が今や其第一等國の地位を失はんとしつゝあるのも亦同一の原因に由るのであると思ひます、國民の精華は悉く軍人と成り、其屑のみが殘て教師となり、文人となり、美術家となり、實業家となるのであります、それで國の衰へない理由はありません、社會の道德の日々に衰へ行は決して怪むに足り

ません、德性涵養の任に當る教育家宗教家の殆んどすべてが國民の渣滓であるからであります、聖賢君子の爲すべき業が小人愚物に委ねらるゝからであります、軍人たるは貴くして宗教家たるは卑しき國に道德が盛んになりやう筈はありません、戰爭に由て國威は顯揚されますが、それと同時に國力は減退します、爾うして顯揚が虛榮となり、減退が空乏と成つて終に亡國となるのであります。天然に於けるが如く歷史に於ても、之を狹く見ずして廣く見て御覽なさい、短かく見ずして永く見て御覽なさい、戰爭が決して國を興し國を保つの途でない事が明かに分かります、戰爭で興つた國で亡びない國は未だ曾てありません、唯時日の問題であります、同一の原因は同一の結果に終ります、劍を以て興つた國は劍と其惡結果とに由て亡びます。

世に劍を以て興らず、又劍を以て維持されない一つの國があります、それは猶太國であります、牧人アブラハムの家より出で、連綿として四千年後の今日に

至ります、其王政時代に於て、又其マカビー家執權の時に方て、武を以て隣國を壓したことがありましたけれども、それは國民としては至つて僅かの間でありました、猶太人は主として無抵抗主義の民であります、迫害せらるゝのが彼等の特性であります、猶太人の歷史は戰爭史ではなくして迫害史であります、遠くは紀元前三百年頃、シリヤ王アンチオカス・エピフハネスの虐待凌辱する所となりし以來、近くは露國キシネフに於て彼等の多數が虐殺されしまで、猶太人に迫害の絕えた事はありません、然るに彼等は之に對して一劍を磨かずでありまして、彼等は唯待はるゝが儘に己が身を任かしました、若し腕力の勝敗が民の興亡を決する者でありますならば猶太人は既に業に此世より絕たれたのであります、然かし事實は何うであります乎。

アブラハムが始めてカルデヤを出た時には未だアッシリヤも起らず、バビロニヤも立たず、エジプトは隆盛の極に居り、ギリシヤもローマも未だ時の胎内に

在つた時でありました、然るに世紀は變り、紀元は改まりて、是等の國民は榮えては衰へ、興きては亡びましたけれども、常に變らないのは賤視められたる無抵抗主義の猶太人であります、ローマは滅びても猶太は亡びませんでした、歐洲に國は興り、國は衰へましたけれども依然たるは矢張り猶太人であります、爾うして其數今や一千一百萬以上、世界各國至る所に散在し、其財權を握り、其思想を左右し、其哲學と美術に貢獻し、實に敬すべき恐るべき一大勢力であります、世界第一等の人物を產出すること多き猶太人の如きはありません、哲學者としてはスピノザを出し、音樂家としてはメンデルゾーンを出し、政治家としてはヂスレーリを出し、新聞記者としてはブローヴィッツを出し、其他數へ來れば數限りはありません、若し文明世界より猶太人を除いたならば其最良最善最美のものは無くなります、民として繼續することの長きこと猶太人に及ぶものはありません、世界第一等の人物を產出することの多き猶太人に及ぶもの

はありません、すべての點に於て（勿論軍事を除き）勢力の充溢すること猶太人に及ぶものはありません、猶太人は露西亞人が亡びた後も尙ほ存ります、猶太人は英人、佛人、獨逸人が消え去つた後にも尙ほ榮えます、爾うして此民が特に無抵抗主義の民であることを知つて、民は戰爭に由て存在する者でないことが最も明かに判ります。

人は申しませう、猶太人の勢力は大なりと雖も彼等に國土なるものはない、故に彼等は既に亡國の民であると。

誠に其通りであります、猶太人に制限されたる國土はありません、併しそれが即ち彼等が强い理由であります、彼等は世界を己が國土となす者であります、彼等は國土獲得と云ふ異邦人の誤謬より夙に脫しました、彼等は國土を見ること空氣を見るが如く、之を一國民の專有物として見ません、猶太人は國土專有の念を絕つてより世界的の民となつたのであります、戰爭の廢まる時は土地獲

得の野心の絶ゆる時であります、猶太人に其割據する國土の無いのは其弱點であります。はなくして却て其强所であります。

猶太人に關すると同じ事が支那人に關しても言はれます、支那人は猶太人程偉大の民ではありません、然し之に似て戰爭嫌ひの民であります、爾うして其結果として蕃殖力非常に强く、是れ又稍もすれば世界を横領せんとする民であります、列强は武力を以て支那の國土を分割することが出來ます、然し支那人を征服することは出來ません、否な、支那を取るの危險は終に支那人に取らるるの危險にあります、横濱、上海、香港等に於て、日本人は名義を貴び、英人は權利を求めつゝある間に、支那人は徐々として實力を得つゝあります、支那人は國旗のために戰ひません、實利のために戰ひます、故に劍を用ひずして算盤を用ひます、賤むべしと云へば賤むべしであります、慧しと云へば慧くあります、何れにしろ算盤は劍よりも强い武器であります、劍を以てする者の斃れ

し後々までも算盤を以てする者は存ります。

斯くて人類の歴史は戰爭の利益を敎へません、其害毒を傳へます、國は戰爭を以て亡びます、民は戰爭を廢めて榮えます、世界は徐々と戰爭嫌ひの民の手に渡りつゝあります。

戰爭廢止の必要

斯く言ふも人は言ひませう、說明は誠に立派である、然し事實は矢張り事實である、戰爭を今廢めることは出來ない、軍備擴張は列强目下の最大問題である、詩人の夢想は午睡の幇助とはなるが、實際問題を解決するに足りないと。

若し爾うならば止むを得ません、私共は沈默を守りませう、然し縱令私共は默りまするも神と天然とは默りません、神の律法と天然の法則とは政治家の評議に關はらず行はれます、**ヱホバも亦智慧あるべし**と聖書に記してあります（以

賽亞書三十一章二節)、實際問題は實際政治家の評議に由て解決されません、彼等は實際如何なる大問題を解決しました乎、彼等は戰爭を議決して其後始末に困つて居るではありません乎、夢想家は詩人ではなくして却て彼等政治家であります、神を知らず、天然を學ばない彼等は間違より間違へと陷りつゝあります。

戰爭は廢まります、必ず廢まります、之れは私共非戰主義者が非戰論を唱ふるからではありません、神が之を命じ天然が之を要求します故に終に必ず廢まります、若し進化の理が今日直に無に歸する者ならばいざ知らず、宇宙と人類とが其今日まで取り來りし徑路に由て進みますならば戰爭は終に必ず廢まります。

人類が進むに從て戰爭の害は益々增して其益は益々減じて來ます、隨て戰爭は勝つも負けるも大なる損害たるに至ります、戰爭は其代價を償はず其目的を達

せざるに至ります、爾うして其時に至れば國民は否でも戰爭を廢めます、爾うして斯かる時は時々刻々と近づきつゝあります、列强目下の軍備增大の如きも、斯かる時機の到來を示すの外ありません、列强は今や餓死する乎戰死する乎の境に達しつゝあります、戰へば敵の手に斃れ、戰はざれば債主の手に斃れんとしつゝあります、茲に於てか國民は生きんと欲すれば戰爭を廢むるより外に手段の無き域に達しつゝあります、爾うして國民に生存慾の絕えざる限りは、彼等は餘儀なくせられて戰爭を止めます。

斯かる場合に臨んで最も慧き國民は最も早く戰爭を止める國民であります、爾うして最も愚かなる國民は最後まで戰爭と其準備とを繼續する國民であります、國力を益なき戰爭のために消費し悉して、彼等は將さに開けんとする平和的競爭場裡に入つて、憐れなる敗北を取らざるを得ません、獅子や虎の如くに勢力の大部分を牙や爪に消費せずして、哲學者や慈善家の如くに、之を腦と心

とに蓄へ置かなければなりません、之を爲さずして目下の勢に驅られ、萬事を犧牲に供して戰爭の準備を爲すが如き、之を愚の極と稱はざるを得ません。

平和の福音

絶對的非戰主義

（明治三十六年九月二日記す）

平和を求むる者は福なり、其人は神の子と稱へらるべければなり（馬太傳五章九節）。

イエス彼に曰ひけるは爾の劍を故處に收めよ、凡て劍を取る者は劍にて亡ぶべし（同廿六章五十二節）。

今や戰雲、東亞の空を蔽ふに方りまして、茲に刻下の最大問題に對して私共キリストを信ずる者の態度を明かにして置くの必要があると思ひます、斯かる時にこそ私共は世の變現極りなき所説に耳を傾くることなく、單に毀つべからざる聖書の確言に頼りまして私共の進退を定むべきであると思ひます。

爾うして問題は如何に混雜して居りまして、又其間に如何なる情實が纏綿して居りましても、聖書の、殊に新約聖書の、此事に關して私共に命ずる所は唯一

つであります、即ち絶對的の平和であります、如何なる場合に於ても劍を以て爭はないことであります、萬止むを得ずんば敵に讓り、後は神の怒を待つことであります、此態度を取るの難易は私共の問ふべき所ではありません、絶對の平和は聖書の明白なる訓誡でありまして、私共、若し神と良心とに對して忠實ならんと欲すれば此態度を取るより他に途はありません、

行得べき所は力を竭して人々と睦親むべし、我が愛する者よ、其仇を報るなかれ、退きて主の怒を待て、そは錄して主の曰給ひけるは仇を復すは我に在り、我れ必ず之を報ひんとあれば也、是故に爾の敵若し飢なば之に食らはせ、若し渴かば之に飲ませよ、爾、如此するは熱炭を彼の首に積むなり、爾、惡に勝たるゝ勿れ、善をもて惡に勝つべし（羅馬書十二章十八—廿一節）

是れは何にも個人と個人との間に關してばかりの敎訓ではありません、人と人との間の關係は凡て斯くあるべき筈のものでありまして、人の集合體なる國民

と國民との間に關しても適用すべき神の敎訓であります、キリストが世に顯はれ給ひしより千九百年後の今日、戰爭なる野蠻人の遺風はモハヤ世に存在の理由を有たない者であります、戰爭は人を殺すことでありまして、「人を殺す者は窮なき生命その衷に存ることなし」との使徒ヨハネの言は火を睹るよりも明かなる眞理であります、世に「義戰」ありといふ說は今や平和の主を仰ぐキリスト信者の口に上すべからざるものであります、私自身は今は絕對的非戰論者であります。

然し世には未だ斯くまでに斷言することの出來ないキリスト信者があります、彼等は戰爭は惡事であるとは知りながら、時には神が戰爭を是認し給ふ場合があると信じて居ります、彼等は其所信を强めるために舊約聖書の記事を引き來ります、又コロムウエル、ワシントン等の事蹟を引照します、又戰爭に勝さる惡事の在ることを說きまして、戰爭はより小なる惡事であると曰ひて其決行を

迫まります、然しながら是れ皆な取るに足らざる議論であります。

一、舊約聖書が戰爭を是認する故に今も尙ほ之を繼續すべしとの見解は全く聖書の精神を誤解するより來る謬見であります、聖書は神の開發的自顯を錄した書でありまして、其始より絕對的に神の聖意を顯はした者ではありません、神は戰爭を是認して、之を舊約時代の勇者に許し給ふたのではありません、「彼等の心の頑硬なるため」に彼等が其罪惡なるを覺り得るまで、曰はゝ之を默許し給ふたのであります、故に時到りて彼の愛子を世に送り、彼に平和の福音を宣べさせ給ふに方て、

目にて目を償ひ齒にて齒を償へと言へることあるは爾曹が聞きし所なり、然れど我、爾曹に告げん、惡に敵することなかれ、人、爾の右の頰を批ば亦他の頰をも轉して之に向けよ、爾を訴へて裏衣を取らんとする者には外服をも亦とらせよ、人、爾に一里の公役を强ひなば之と偕に二里ゆけ、爾に求むる者

には與へ、借らんとする者を卻くる勿れ（馬太傳五章三十八―四十二節）、

斯う云ふ福音を宣べさせ給ひました時に復讐の精神と之に伴ふ戰爭とは絕對的に非認されたのであります、此宣言ありて以來は戰爭は絕對的に惡事として認められたのであります、我儕は今や信仰や誠實に就ては舊約時代のヨシュアやギデオンに學ぶべきでありますが、然し戰爭に就ては少しなりとも彼等に倣ふてはなりません、戰爭を絕對的惡事と見做すの一點に於ても我儕今日のキリスト信者は遙かにアブラハムやダビデの上に立つ者であります。

二、キリスト信者にして劍を拔いた者も數限りありません。有名なるシャーレマン大王、三十年戰爭の勇者瑞典國王ガスタバス・アドルハス、和蘭のオレンヂ公非ルヘルム、英國のコロムウエル、米國のワシントン等、枚擧に遑ありません、夫れ故に或る信者は申します、「私は茲に表白致します、私も一度は斯かる信者の一人でありました、日淸戰爭の時に日本の「義」を英文に綴つて世界

に訴へた者は私でありました、私は今は其時の私の愚と不信を恥て歌みません、私は此事に關して單へに神の赦免を祈ります)、斯かる篤信のキリスト信者さへ戰爭に從事した故に、我等も時と塲合とに由ては劍を拔いても宜しいと、爾うして是れ一見して甚だ尤らしく見ゆる申分であります。

然しながら私共は更らに再び深く考へなければなりません、コロムウエルは確かにエライ人でありました、然しながら彼はキリストではありませんでした、コロムウエルは彼の塲合に於て劍に斃るのが彼の神に對する義務であると信じたのでありませう、然しながら若しキリストがコロムウエルであつたならば彼は戰ひ給はなかつたに相違ありません、國のために戰つたコロムウエルはエライ人でありましたが、戰はずして自己の身を敵人に附たし、之を十字架に釘けしめ給ひしキリストは更らにエライ人でありました、爾うして私共キリスト信者はコロムウエルを學ばずしてキリストを學ぶべきであります。

斯う申しましたならば或人は申しませう、若しあの時にコロムウエルが劍を拔かなかつたならば英國人の自由は如何成つたであらうと、然し私は此問に答ふるに他の問ひを以てします、若しキリストがパリサイ人や祭司の長等に襲はれ給ひました時に其自衛の策を取られ、彼の弟子の一人に命じて其劍を拔いて敵を殪さしめ給ひしならば人類の自由は如何なりましたらう、キリストは彼の身を護らんとて劍を拔いて祭司の長の僕を擊てその耳を削ぎおとせし者に向つて何んと申されましたか、

イエス彼に曰ひけるは爾の劍を故處に收めよ、凡て劍をとる者は劍にて亡ぶべし、我いま十二軍餘の天使を我父に請ふて之を受ること能はずと爾曹思ふ乎、もし然かせば如此あるべき事を錄せし聖書に如何で應はん乎(馬太傳廿六章五十二、五十三節)、

自由は自由の敵を殪して得らるゝものでありません、其敵に擒にせられ、彼の

侮辱する所となり、終に彼に殺されて而かして後に自由は復活するものであります、是れが基督教の根本的教義であります、此教義はコロムウエルが何んと言はふと、ワシントンが何う辯じやうと決して斃るゝ者ではありません、世の人の目には見えませんけれども基督信者の目には瞭然たるべきことは此事であります、人の自由は劍を以て得られた者であると思ふのは大なる間違でありまず、自由は生命の犧牲を以て得られたものであります、キリストを始めとしてヤコブ、パウロ、ペテロ等、凡てキリストの生涯に倣ひし者の無抵抗の流血を以て買はれたものであります、コロムウエルやワシントンのエライ理由を彼等の拔いた劍に置いて、彼等の流した血の涙に於て求めない者は、兩雄の心事を覺らない者であります。

戰爭はコロムウエルの場合に於ても決して無害ではありませんでした、コロムウエルの理想は彼が血を流した故に彼の死後四百年後の今日に至るも未だ世に

行はれません、而已ならず近頃ありし南阿戰爭の如きに於てすら、英國の主戰論者は例をコロムウエルに引いてかの二十世紀の大恥辱と稱せられる殘忍を極めし南阿戰爭を續けました、戰爭は正義に達するための捷徑のやうで實は極の迂廻道であります、自由と平和と獨立と一致とに達する最捷徑はキリスト御自身の取られた途で、即ち無抵抗主義であります、是れは聖書が最も明白に示す主義でありまして、自稱基督教國なるものが、此理想と相距る甚だ遠きは實に歎ずべき事であります。

武裝せる基督教國？そんな怪物の世に存在しやう筈はありません、武裝せるものは基督教國ではありません、武裝せる者は强盜であります、基督教國とは預言者イザヤの言に從ひ「劍をうちかへて鋤となし、その鎗をうちかへて鎌となし、國は國にむかひて劍をあげず、戰爭のことを再び學ばざる」國でなければなりません（以賽亞書二章四節）、聖書に照らして見て英國も米國も露國も佛國

も基督教國ではありません、彼等は金箔附きの僞善國であります。

三、若し戰爭はより小なる惡事であつて世には戰爭に勝る惡事があると稱へる人がありまするならば其人は自分で何を曰ふて居るのかを知らない人であると思ひます、戰爭よりも大なる惡事は何でありますか、怨恨、嫉妬、忿怒、兇殺、醉酒、放蕩等の有りとあらゆる凡ての罪惡を一括したる戰爭よりも大なる惡事が世にあるとならば其惡事は何んでありまするか、若し無辜の人を殺さなければ達しられない善事があるとならば其善事は何んでありますか、「人の怒は神の義を行ふ能はず」と聖書に錄してあります（雅各書一章廿節）、惡しき手段を以て善き目的に達するとは出來ません、殺人術を施して東洋永久の平和を計らんなど云ふことは以ての外であります、平和は決して否な決して。戰爭を透ほして來りません、平和は戰爭を廢して來ります、武器を擱くこと、是れが平和の始まりであります。

斯かる明白なる理由のあることでありますれば私共平和の主なるイエスキリストを主として戴く者は絶對的に戰爭に反對しなければなりません、私共の額に印せられたるキリスト信徒の名稱が私共を平和の唱導者として世に紹介するものであります、私共は我國人の良心に訴へ、亦我國の將來を思ひ、亦我國の反對に立ち基督教を標榜する露西亞人の僞善を責むるために何處までも非戰論を主張しなければなりません、今や若し日本と露國とが開戰するに至りますならば是れ世界の大事であります、其ために苦しむ者は日本人と露西亞人と許りではありません、それがために全世界の戰爭を惹起すに至つて五大陸を修羅の街と化するに至るかも知れません、斯かる大危險に臨むとでありますれば私共は斷然意を決し、神に賴り其能力を仰いで茲に是非共開戰を喰止めなければなりません。

（明治三十六年九月二日記す）

戰時に於ける非戰主義者の態度

私共は戰爭が始まりたればとて私共の非戰主義を廢めません、否な、戰爭其物が非戰主義の最も好き證明者でありますから、私共は面前戰爭を目擊するに方て、益々私共の確信を強めるのであります、國家經濟に關することは私共の多く知らないことでありますから、私共はそれに就ては何にも申しません、然し其道德上の惡影響は實に甚だしいものでありまして、私共の如く道德を以て人類に取り最も大切なるものであると見做す者に取りましては、縱し戰爭が大大的勝利を以て終ると致しまするも、其得る所は決して失ひし所を償ふに足りないと信じます。

人は敵の惡事のみを語て我が惡事は悉く之を蔽ふを以て普通の人情であると信じ、之を爲すを以て愛國心である、敵愾心であると唱へて居ります、然しなが

ら彼等は此事を爲して己の爲めに如何に大なる災害を積みつゝある乎を知りません、仁慈といひ、寛容といふことは決して他人のためのみではなくして亦自己の爲めであることは倫理學上、善く分つたことであります、敵を憎めば自づと人類全體を憎むに至り、其結果己が同胞を憎み、己が骨肉を憎み、終には己れ自身までを嫌ふに至ることは理論に訴へ實驗に照らして極く明白なることであります、故に吾人の最も努むべきことは誰彼を憎む憎まぬといふことではなくして、憎惡の念其物を心に蓄へないことであります、「他人を咒詛へば穴二つ」との諺は此原理から出たものであります、敵を憎むの心は戰爭終つて後は同胞兄弟を憎むの心と變じます、爾うして其心は終に人生其物を憎む心と變じまして、斯かる心を挑發して止まざれば人は終には自己の身を害はんとするの心を釀すまでに至ります、是れ實に恩惠に富める天然の法則でありまして、天然は斯く原因結果の大綱を以て全人類を繫ぎ合せて同類間の爭鬪殺伐を防ぐのであ

ります。

斯う申しますると多くの人々は申します、「夫れならば何故非戰主義を唱へて開戰後の今日と雖も開戰前の如くに戰爭に反對しない乎」と、此詰問に對して私共は斯う答へます、

一、私共は戰爭の破裂するまでは私共の微力のあらん限り、之に向つて反對を唱へました、然しながら私共の切望が納れられずして、開戰となりました以上は、それで私共が戰爭に對して取るべき手段が一段落を告げたのであります、言ふまでもなく、非戰主義とは平和主義の意でありまして之を非戰といふは平和の消極的一面をいふのであります、爾うして戰爭を喰止めて平和を維持せんとの私共の希望が破れた以上は、私共は今度は如何にして一日も早く平和を恢復せん乎との思考を起すに至つたのであります、言ふまでもなく、主義は我がためのものではありません、國家、社會、人類のためのものであります、私共

が主義を遂行せんとするは私共の名譽を博せんとするためでもなく、又た、我が潔白を世に表して己が滿足を買はんとするためでもありません、平和主義者の義務と責任と目的とは平和の維持又は其恢復にあります、爾うして之を維持し切れざる場合に於ては第二の手段として其恢復の期を早め、且つ其機會を作るにあります、堰止んとして止め得ざりし水は第二の堰を作つて之を止めんとするのみであります、然るを第一の堰の破れしを憤り、水を叱り、堰守を罵るのは快は少しく快なるかも知れませんが、然かし是れ何の益にもならないことであります、國民の憤怒は今は既に放たれて大河の土堤を決せしが如き勢力を以て敵國に向て注がれつゝあるのであります、是れは今は冷靜なる忠告を以て留めることの出來るものではありません、私共平和主義者が全然事理を解せざる者でない以上は今の時に方て非戰を疾呼して戰鬪を阻遏せんとするやうな、そんな愚かなることは致しません。

二、平和を薦めるの時期は未だ當分來たらず、去ればとて戰爭を止めることは出來ません、それならば私共平和主義者は今は茫然として手を束ねて居る乎といふに決して爾うではありません、爰に今日、私共に取りて最も相應しき一つの事業が具へられてあります、それは出征兵士の遺族の慰問であります、私共、金錢に乏しき者は勿論、世の寶を以て多く彼等可憐の民を慰めることは出來ません、然しながら慰藉は金錢の施與にのみ限りませんから、私共は力相應の援助を彼等に供することが出來ます、或は彼等の家事の相談相手となり、或は我が家の剩餘品を以て彼等の不足を補ひ、又或る特別の場合に於ては彼等に心靈上の慰藉を供して彼等の寂寥の一部分を癒すことも出來ます、我等は斯うして軍人を慰めて別に戰爭其物を是認するのではありません、是等無辜の民に取りましては戰爭は天災の一種と見ても宜しいと思ひます、是れは彼等が招いて起つた事でもなく、又好んで迎へた事でもありません、故に私共は飢饉や海

嘯の時に彼等を援けると同じ心を以て私共の滿腔の同情を彼等に表することが出來ます、現に非戰論者として世界に有名なる露國のトルストイ伯の如きも、宣戰の布告に接するや、直に彼の著書一千組を寄附して其賣上高を以て兵士遺族の救濟に當てたとのことであります、此場合に於ける伯の此行爲を評して伯を以てその平生の主義に背く者なりとなす者の如きは是れ伯の非戰主義を以て情もなき熱もなき、唯一片の偏屈主義と見做す者であります、非戰主義は我がための主義ではありません、是れは人を救ふための主義であります、召集されし兵士を勵まし、其遺族を慰むるが如きは是れ決して非戰主義に反くことではありません。

三、戰爭は勿論永久に繼續くべきものではありません、一日に百萬圓以上の出費を要する戰爭が何年も續くものでありますならば之に堪ゆるの國家は何所にもありません、戰爭は遊戲ではありません、是は國家の大患難であります、故

に國家に最も忠實なる者は戰爭を勸める者ではなくして之を引止むる者であります、爾うして不幸、開戰に至りました場合には一日も早く平和の克復せんことを計る者であります、爾うして眞個の平和は武力の壓迫に餘儀なくせられて來るものではありません、劍を鞘に收めることが永久の平和ではありません、言ふまでもなく平和とは好意より出た者でなくてはなりません、軍人は勝利を說き、政治家は國威宣揚を唱へますが、然し眞個の平和はそんな低い卑い思念より來るものではありません、永久に續くべき平和は敵を敬し、其適當の利益と權利とを認めてやるより來る者であります、若し人を殺して平和が來るものでありますならば盜んで富が來るに相違ありません、憎んで愛が來るに相違ありません、戰爭は決して平和を作りません、爾う思ふのが日本國の政治家のみならず、世界各國の政治家の迷信であります、世に迷信があると言ひますが、戰爭に關する文明人種の迷信に勝るの迷信はありません、戰爭は人を殺します、

產を破ります、總ての慘事、總ての惡事を惹起します、然しながら平和丈けは來たしません、平和の克復は戰爭以外の事業であります、爾うして私共平和主義者は平和に達する常道を經て、之に達せんとする者であります、即ち總ての手段を盡して彼我の間に存する總ての敵意を排除し、彼をして我を信せしめ、我をして彼を敬せしむるの道を講ずる者であります、爾うして之を爲すに種々の方法があります、今爰に其總てを述ぶることは出來ませんが、然し其一つを言ひますれば爭鬪は大抵は相互の誤解から來るものでありますから、私共平和主義者は彼我の間に立つて其間に存する總ての誤解を取除くやうに努めます、かの歐米の新聞記者等が漫りに日露兩國民の敵對心を增長せしめ、終に今回の此悲むべき破裂を見るに至らしめし一原因となりしが如きは、私共平和主義者が爲さんと欲する所の正反對の所行であります、「平和を計る者は福なり、其人は神の子と稱へらるべければなり」とは基督敎の大敎訓であります、然るに是

等歐米人の如きは宣教師を他國に送つて其教化を計りながら、それと同時に國と國とを戰爭を誘ひ、無辜き民の血を流さしめて、却て得意然たるのであります、神は平和を愛し給ひ、惡魔は爭鬪を愛します、歐米人今回の所行は純然たる惡魔の所行であります、私共以來は彼等を平和の友としては迎へない積りであります。

勿論今の時は平和主義者の活動の時ではありません、平和主義者の戰時に於けるは軍人の平時に於けるが如き者であります、即ち用の至て尠い時であります、然しながら平和は人生の常態でありまして、戰爭は其非常態でありますから、私共平和主義者の世に貢獻すべき時は直に來ります、平和克復の時に私共の服役は必ず要求されます、平和持續、和親深厚のために私共の助言と勤勞とは必ず受納れられます、私共は戰時の今日は、軍人の平時に於けるが如く私共の勞役の要求さるゝ時を靜かに待つて居れば宜いのであります、新聞記者が筆を揮

へて擧國一致を叫ぶからとて、平和主義者までが直に武裝して戰員に加はらんとするが如きは、是れ愚の極である計りでなく、國家に對して　尤も不忠實なることであります、若し國家は敵國の侵害を防ぐために軍人を要するとならば、其國土の發育のために、其富の增進のために、其社會の改善のために、其道德の純正を守るために、更らに一層平和主義者の必要を感ずる者であります、若し國家を動物に譬へて見まするならば軍人は爪か牙のやうなものでありまして、是れは攻擊又は防禦の機關であります、是に反して平和主義者は胃の腑か腸のやうなものでありまして、是れは滋養補育の機關であります、爾うして虎や獅子の如き肉食獸に於きましては、爪と牙とは甚だ肝要なる機關ではありますが、然し彼等と雖も消化機の平和的作用なくしては一日も存在することの出來るものではありません、殊に羊、馬、牛の如き有用動物に於きましては、攻擊的機關は殆んど用なき者でありまして、消化機能は非常の發達を呈はし